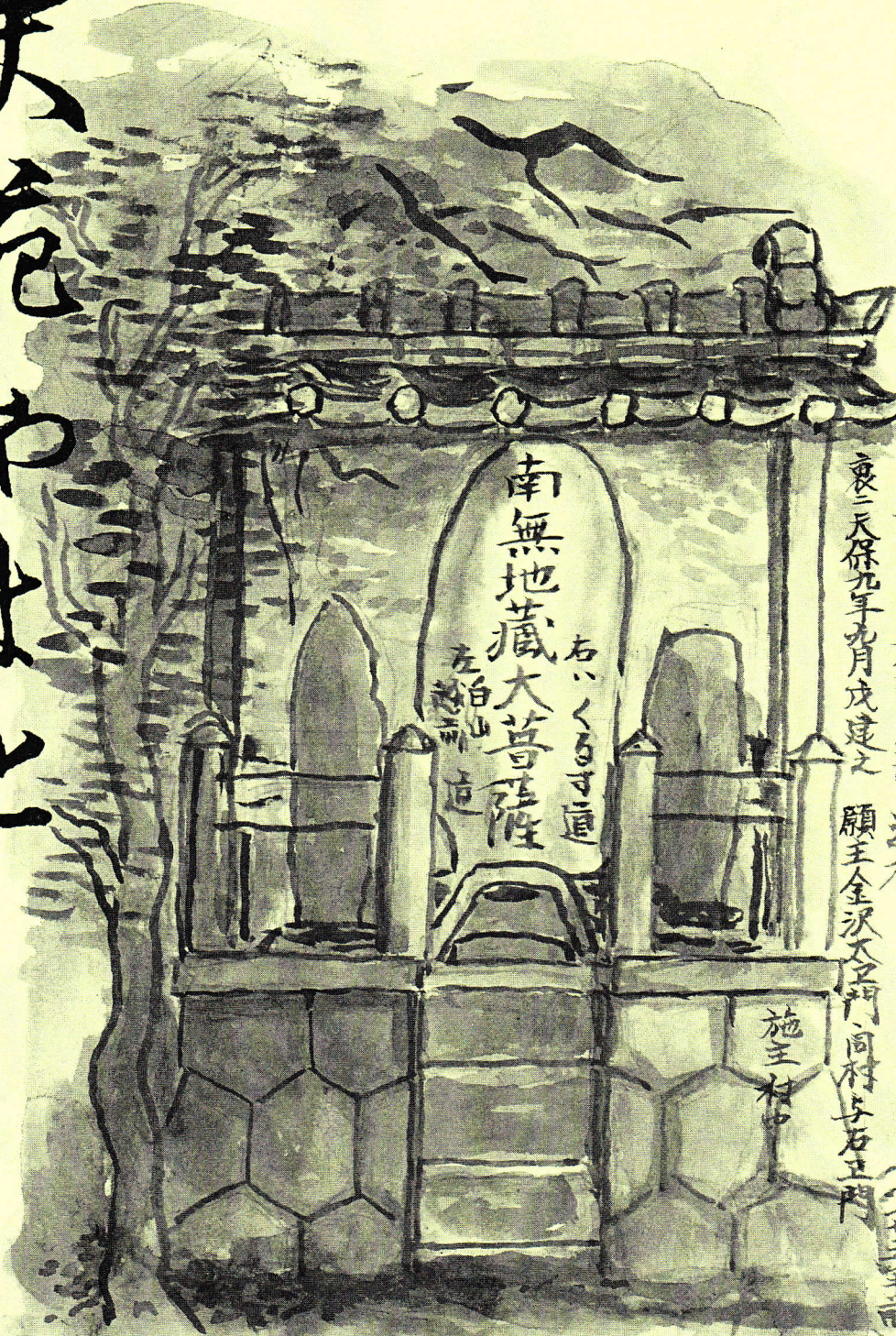


史苑



大和町徳永辻道標
 正南無地蔵大菩薩、而側、右、く、百、寸、道、左、三、鳥、越前道、
 地内、三、戸、越前街道、道標、
 裏、三、天、保、九、年、九、月、戊、建、之、願、主、金、沢、大、臣、門、同、村、古、石、立、門、
 (一、七、五、二、年、前)

南無地蔵大菩薩
 右、く、百、寸、道
 左、三、鳥、越前道

施主村

大和町徳永旧道(辻)

『史苑やまと9号』 発刊にあたって

会長 石神 堯 生

二年に一回定期的に発行しております『史苑やまと』ですが、母体であるわが郡上郷土史研究会は、残念ながら会員の高齢化に伴って活動も停滞しがちで、加えて諸費用の備蓄もなくなり、会誌発行は前回の第8号をもって休刊とも考えておりました。しかし、これまで営々として取り組んでこられた先輩たちの意志を継承するために、引き続き第9号を発行することにしました。

第8号までは、編集、印刷、製本などすべて専門の印刷会社に委託しておりましたが、その費用は市からいただく助成金によって賄っておりました。しかし今はその資金もなくなり、発行に至るすべての作業を、会員の手作業で進めております。

原稿の収集について心配しておりましたが、幸いにご覧いただくように、前回より小規模とはいえ、三〇ページを越す冊子にまとめることが出来ました。最初の武藤正文先生の「木蛇寺殿憤記」及び「尊星王院鐘銘」は、今回意訳を付していただき、一層わかりやすいものになりました。また今回は、会員以外の二人の方から特別寄稿をお願いしました。いずれも郷土史としても価値ある断片と思つたからです。一つは桑田洋一氏の「志比の宮大工 大久保吉郎衛門」と阿葉家愛子氏の「私の戦争体験 救護看護婦として」の二編であります。桑田氏はある神社の世話役をしておられますが、市内の神社拝殿の建築に興味を持ち、由来の宮大工を調べておられます。また阿葉家さんは、郡上市遺族会の集まりでこの体験談を披露したところ、会場の参加者から「この話を是非何かに残してほしい」という依頼を受けて、この会誌に掲載させていただくことになりました。最後の瀧日さんの「郡上につたわる昔話・伝説目録」は非常に膨大なものですが、その中の一部を、資料内容の関係で横罫で掲載しました。

以上のように今回は前回に比べ小規模・省エネのきらいはありますが、一応研究誌の体裁を整えることが出来たことを幸甚に思います。

尊星王院鐘銘

1 濃之郡上栗栖洞尊星王院
ノウノグジョウクルスボラソソノセイオウイン
ンシノカタワラ
神祠之側、

2 本有楼鐘
モトロウシヨウアリ

3 応仁戊子
オウニンツチノエネ

4 平宗玄兵敗之日失火焉
東氏數ヘイソウアルノヒコロシツツカカス
平宗玄(東氏數)の兵が破れた日、
これを失火した

5 祠院悉燬
シインコトゴトヤク

6 唯楼独存耳
タダロウヒトリソノスノミ

7 明年己丑
ミヨウネンツチノトウシ

8 賢弟平常縁
ケンニケイライツトヨリ

9 再復旧治
フタタビキユウニフクシオサム

美濃国郡上栗栖洞、尊星王院の
神社の境内の傍らに

元、鐘楼があった(本は元)

応仁二年(一四六八)戊子の年

平宗玄(東氏數)の兵が破れた日、
これを失火した

神社寺院(堂塔伽藍)は全部焼けてしまった

唯、楼の一つ残っただけであった

翌年(文明元年 一四六九)文明元年己丑の年

弟の常縁が(賢は尊称)

再び元に復し治めた

10 而以洞中無鐘為闕典
シヨウツチモツチナクチユウカネナクケツマエトナル

11 千辰之夏
ミズノエタツノナツ

12 幕下諸老胥議曰
バツカノシヨロウシヨギンテイワク

13 鐘者所_{カネハコソ}以警昏昕
ハコソキンヨケイスルユエンナリ

14 祛障蔽
シヨクヘイヨキヨシ

15 和神人一也
シンジンヤワラナリ

16 不可以不亟図
モツテスミヤカニハカラザルベカラズ

17 因告之院宰沙門賢観
ヨツテコレインサイシャモンケンカンニツツグ

18 観忻然曰
カンキンゼントテイワク

19 偶有以巨鏞鬻于貨者
クダマキヨウワモツアカニヒサグモノアリ

而して、寺内に鐘がなく經典は欠けることになった（闕_レ欠くこと）
文明四年壬辰の年

東氏配下の家臣たちが相謀って云うには

鐘は夕（たそがれ）朝（あけがた）を知らせるものであり

障害・煩惱をほらい（祛_レちらす）障蔽（障は障害・煩惱、蔽は覆蔽）

人のさとりを得ることを傷害する煩惱のこと

神・人をやわらげなごませるのである

だから速やかに再興を考えるべきである

よつて、このことを寺（尊星王院）の住持である賢観に報らせた

（院宰_レ寺の主、寺院の執事、沙門_レ出家・修行者・僧）

賢観は大へん喜び欣然と云った

時に、たまたま大きな鐘をもって銭貨にかえる者がいる

20 吾為化主、速成尔志
ワレケンユトナリスミヤカニケンジンノコロコザシヲオサ

21 時詣白山之客多矣
トキニエハクサンニモウアルキヤクオオシ

22 輒勸出薄助
スワチハクシヨダスラスメ

23 而後遍巡治内村郭
シコウシテノチアマネクチナイノソノカクノイエイエサメダリ

24 家扣戸千以一楮囊
イエコセンイチチヨノウラモツテタク

25 乞其所有之穀
ソノウエスルトコロノコクヲコウ

26 或米(粟)或豆
アルイハコメ(アワ)アルイハマメ

27 隨而樂施
シテガイテホドコシヲクノシム

28 聚之糶以爲三十緡
コレヲアツメテウリダシモツテサンジユキヨウトナレ

29 遂与而取之
ツイニエタエシコウシテコレヲトル

30 其將
ソノマサニカケンソンシ

自分(私)が勸進主となり、速やかにこの志を成さん

ちようど当時白山への参詣者(客)が多かつた矣語の止むことば 断定の語

即ち薄志を出してもらうことを奨め

しかして後、あまねく治内の村の家々を巡り

家を一戸残らず一つの袋をもつて回り 戸千多くの家、すべての家 扣訪ねる

それぞれの家が持っている穀物を出してもらった

(差し出された物は)ある所では米(粟)、ある所では豆であった

求めに随い各家では喜んで施してくれた

これを集めて売り、それは三十緡ゼニサシとなった

(緡キヨウ) 一緡ゼニサシは凡そ百文、三十緡は三千文 三貫文

遂にこれ(錢)を与えて鐘を取った(得た)

それを正にけることにした

31 観来需予刻銘
カンキタリヨニコクメイヨモトム

32 予曰、観唯知鐘
ヨイワク、カンタダカネヲシル

33 所、以其為鐘則未之知也
ソノカネトナルタレユエカネナラザレナリ

34 吾曉之
ワレコトヲサトル

35 拘留孫仏
ケルソンブツ

36 於竺乾修多羅院
チフケンシユクラインニオイテ

37 造青石鐘
セイセキカネヲツクル

38 於日出時
ヒイズレトキニ

39 有諸化仏、与日俱出
シヨケンツアリ

41 聞者証聖
モンジャシヨウシヨウ

42 今斯鐘楼之上
イマコノシヨウロウノウエ

賢観がやってきて私に刻銘を求めた

私は言った、賢観はただ鐘のことを考えていただけである

その鐘がもっている本来の意味がまだ分かっているわけではない

私はこのことを知っている

拘留孫仏が（拘留孫仏Ⅱ過去七仏の第四仏この世（今の世）に現われて衆生を救う一千仏の中の第一番の仏（最首））

天竺（印度）の修多羅院に於いて（乾修多羅院Ⅱ仏典のこと、仏典（法）を学び所化（僧）が修行する寺院）

青石の鐘を造った

朝日が登る時に

諸々の仏菩薩があり、日の出とともに姿を現し（化仏Ⅱ仏菩薩が衆生済度の為神通力を持って随所随時に現われたもの）

その教えを聞いた者には、聖にして真なるものが証あかされた

今又、この鐘楼の上に（尊星王院の）

44 観聞邪否邪
カンキョクヤイナヤ

45 証聖者多少
シヨウシヨウウシヤカシヨウ

46 君其問諸尊星王
キミソレヲシヨウソクセイオウニトク

47 銘曰、仏之一音
メイニイワク、ブツノイチオン

48 各異厥聽
オノオノソレヲキクカラコトニス

49 随類而解
レイニシタガイテカイス

50 鐘也只寧
カネナリタダヤスシ

51 惟天惟人
ユイテンニタケヒトニ

52 諸夢忽醒
シヨムタチマナサメ

53 一切惡趣
イツサイノアクシユ

54 衆苦暫停
シユウクシバラクドムヤム

賢観はこれを聞いているか否か

聖なる証しあかを得るものがいくらかいる

あなたはそれを諸々の尊星王に問いかけているのだ

鐘の銘文には次のように言っている（鐘カネの声コエ（教え）は）

それぞれ異なつて聞こえてくる（厥ソレ「其」と同義、「其」より深い意味を有す）

いろいろな鐘の音（教え）の類たぐひに従つて判断する

鐘の音は只、安らかに安樂に響く

天にも人にも伝わる（惟ユイ「意味のない文頭」
語唯とも書く）

諸々のめぐらす思い（夢）は忽ち醒めて

一切の惡道・惡業（そのもと）

もろもろの苦しみから暫く解き放される

55 功コウ之ノ小ショウ大ダイ

功の大小 (功コウ || テガラ、イサオ、シ) 力をつくし(こめ)てこと
ゴト、ワザ、キキメ) をなす、鐘をつく力コウの大小

56 鴻コウ杵シヨ寸セン筵テイ

大きな杵(撞木) 小さな筵(撞木) 筵テイ || 茎なり、
「漢書東方朔法」に 以レ筵撞レ鐘とある

57 雖イチ云ナラズ弗トイ一ウトイ

一樣(同じ) ではないといえども (洽ウ || あまねし 利リ || 利益を究る、さと
うるおし) すがやかす、

58 洽アマ利ハク含カン靈レイ

あまねくすべての人間をうるおすものだ (宜ス || すべてに満足、
しとする) 含カン靈レイ || 人間、性情を
有するもの)

59 爰コ有コシ神ウ宇アリ、名コ之レ尊ラソ星ン

ここに神の社がある、これを尊星と名づけた

60 弗フ勞ソ鳧ノ氏テ、旧ケイ其ン典キ刑ユ

鐘の鑄造者はその仏典のきまりを旧(本)に復することを勞とせず

61 啓ケイ昏シ策サク怠タイ

暗きを啓ヒラき明らかにし、怠りをむち打つ

62 于ア暁カ于ニ暝ク

暁(朝)に暮(夕)に (終日)

63 庶バン貽セイ 万ニ世ノ

後々の世まで残さんと願ひ

64 書コ之レ為ラ銘キ

私は之を書いて鐘銘としたわけである

卍(まんじ)のはなし

佐藤 とき子

私がよく乗せてもらおうタクシーの運転手さんにOさんという方がある。歴史大好きなお兄さんで、観光旅行のお客さんにも喜ばれるらしい。このOさん、私が乗ると三度に一度くらいは「ちよつと聞きたいやけどなあ」と来る。六月某日の質問は私も思いがけなかったので、書いて見ようと思う。

「八幡の愛宕(あたご)の所にある馬頭観音(ばとうかんのん)になあ、普通の形と違う、ドイツのヒットラーのしるしみたいのが彫つてあるのが一つあるんやけんど、どうしてやな?」

「台座に彫つてあるんかな?、私気が付かなんだなあ。そんな細かいこと、よう見つけないたなあ!」

車は早くも目的地に着。彼は紙切れに急いで「卍」こんなような形を描いて見せてくれる。会に出る時間がある私は「調べて知らせるからね!」と約束して降車。これは文化財で愛宕の石碑類の説明看板を建てた時も気付かなかった事で、真剣な目で見るこの大切さを強く感じ「一日も早く答えを知らせよう」と石仏事典なども調べ万全を期した。

その少し後に同じ会社のK運転手さんに出会った。最初に気付いたのはKさんで、早速(さつそく)Oさんに聞いた。二人の運転手さんの不思議(ふしぎ)が私の耳に入ったのである。卍が寺院の記号として地図に使用されている事は小学校で学(まな)んでいるのだが、その種類だとか、意味とか細かいこととなるとはつきり知らないのが正直なところであると思う。

1、日本にこの卍が入ってきたのは、仏教伝来と同時に思われる。
2、「バン」とか「マン」と発声するように示されて、我が国の文字となった。

3、右卍(みぎまんじ)・左卍(ひだりまんじ)・斜(なな)め卍(ななめまんじ)がある。

4、この形は『釈迦如来』の胸毛の形から発したものと言う説があり、仏像の足や手、身体に印(しる)す場合がある。

5、インドや中国では、幸運・福・吉祥(きつしょう)のしるしに用いられ、特に「万徳円満」のしるしとして重んじられている。

6、経典(きょうてん)には「仏」を示す「相」が三十二定められていたが、それはその一つであると書かれている。

7、実際の例を少し拾って見ると、奈良の薬師寺(やくしじ)金堂の本尊(奈良時代前期)や、東大寺大仏の台座(だいざ)の蓮弁(はすの花)に彫つてある線彫りの仏像にも、このしるしが彫られている。

8、仏の徳がこの卍の中心から泉の如く吹き出してくる意味をもっていると言う。

—むすび—

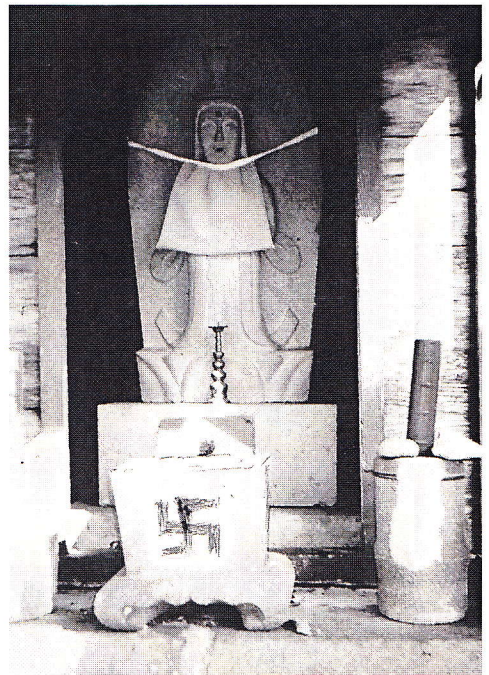
石仏などのお堂の上部につけられている事もあるので、道端(みちばた)に祀(まつ)られていた小さな石仏でも「よく気をつけて拝しないと」と強く感じ、Oさんへのお礼の意味で雄山閣出版(庚申懇話会編)の『日本石仏事典』によりこの稿を記したが、大雨と夏の夏さに体調不良となり、遂に実像を写しに出かけられなかった。

大和町には、とても多くの石像類があり、長年記録を取って下さっています。その中から皆様の目で見つけて下さいますようお願いしております。

三種の卍・卐。卐—斜めの反対回りが万一出現すれば四種となります—、このことは辞典にも記されていないから、みなさんの新発見になるはずです。皆さまお身体を大切に。

—追記—

十月になり、ようやく実物を写してきました。美しい馬頭観音様でした。



文化文政年間郡上の災害

白石博男

はじめに

災害史は、阪神大災害・東日本大震災を思い起こすまでもなく、現代においても特別に重大なものであることは、今更言うまでもあるまい。

郡上地域の災害史全体を調べることは、筆者にとつては対象が広すぎるので、時代を限って、このたびは、江戸時代、それも一九世紀前半、文化（一八〇四～一八）・文政（一八一八～三〇）時代の二〇数年間に限定して、数少ない史資料の中から、郡上災害史のほんの一端ではあるが、跡づけてみたい。

この時期の郡上の災害についての史資料としては、筆者の見限りでは、以下のものがある。

①「悲願寺元隆日記」（以下「元隆日記」と記す）は、白鳥町の悲願寺住職元隆が書き残した過去帳兼日記で、門徒の死亡を記録する過去帳としての本来の役目のほかに、広く地域中心に世相・事件について記述しており、郷土史についての貴重な史料としての史的意義は大である。もう四〇年近く前のことになるが、筆者

は、白鳥町史編集主任坪井市次郎氏が借用していられたのを、限られた時間ではあったが、白鳥町公民館で借覧抄写した。一〇冊前後あったと記憶している。

②「莊嚴講執事帳」（『白鳥町史史料編』）は、周知のように、長滝寺（白鳥町長滝）に残る貴重な第一級史料である。

③「万留帳」（『大和村史史料編』）は、妙見神社主粟飯原豊後正の書留である。世相・事件について細かく記録しており、貴重な史料であるが、ただ、「万留帳」が書き始められたのが、本稿の対象範囲末期の文政九年（一八二六）であるので、残念ながら、この時期の災害史についての記事は多くない。

④『岐阜県災異誌』（岐阜地方気象台編、昭和四〇年）は、明治二四年岐阜測候所発行の『往昔以来三川水被害状況』から、長良川の被害について記載しているので、郡上地方の水害を知る資料となる。

⑤郡上地域の町村史はもちろん基本史料であるが、限られたこの時期についての記事があるのは、上記『白鳥町史』・『大和村史』のほかに、筆者が調べた限りでは、『明方村史史料編』と『高鷲村史』に若干の記事があるのみである。

文化年間の災害

文化二年（一八〇五）

「三月十五日向コダラ与三右衛門、娘同道ニ而町出大嶋橋にて娘落つ、与三右も引上んとて共に川落、与三八無難ニ上ル、娘ハ終いニ溺死す、気の毒成事也」(「元隆日記」)

という川への転落事件があった。

向小駄良村の与三右衛門父娘が、大島橋を渡っている時、川に転落した娘を助けようとして与三右衛門も川に落ち、与三右衛門は無事だったが、娘は溺死したのである。当時の橋は狭く、危険な木の橋であったから、こうした転落事故も時に起こったにちがいない。

この文化二年には、

「此廿七日迄両度洪水、大垣其外甚水入多、人馬イカイコト死ス、大垣ツツミ作候由、長良川より郡上川水コシ北方ノ信州松本五千石御支配ノ御役所流候由、当方共もセキ不残切断、道敷大痛」(同前)

という水害があった。

文化五年から三年続いて、郡上地方を豪雪が襲った。

「正月、当冬前代未聞之大雪、冬中ニ雪式丈八尺積る。二月前代未聞大雪」(「莊嚴講執事帳」)

という「長滝寺莊嚴講執事帳」の記事は、文化五年一月〜二月のものであるが、その翌冬にあたる文化五年十一月にも、

「文化五辰年十一月

大雪ふり。八尺斗御殿様、其年十一月八日御死去被遊候」

(原宗次郎所蔵「作方帳」、『明方村史史料編下巻』)

と、八尺の大雪となった。

この文化五年の雪害について、『岐阜県災異誌』に、「濃飛大雪。郡上郡一五尺、雪崩にて数十軒埋り負傷二七人」と記されている。

さらに、翌文化六年(一八〇九)十一月にも、大雪害となった。

「十一月近年珍敷大雪ニ而平九郎あわ(雪あわ)ニて家をつきつぶし、女房娘式人、長滝彦三郎娘これは平九郎下女勤、石徹

白男与三兵衛勤居遊ニ来居合、暮れ六ツ頃以上六人即死、

・此夜九ツ後、前谷源右衛門も家つぶれ四人死去、夫婦 養女子、

又越前板谷に藤兵衛ト云ほつか商人メ四人死、尤源右 衛門ハ堀

出候後二日も寿有終死、新三郎家もつぶれ母と子式人 死、父も

其時傷四五日迄是も死、

・甚兵衛方も馬屋路 次白屋つ

きつぶし、

・人死は無之、

・外ニ而ハ 相走古屋

ニ而親子が死、

・越前穴馬下山大変松カ畑ニ而 廿一軒つ

ぶれ五十九人計死」(「元隆日記」)

とあるように、悲願寺周辺だけでも三軒がつぶれて、一三人が死

んでいる。

文化八年(一八一二)八月には、

「上之保川沿い郡上郡名皿部村・為真村・大島村・河辺村にて耕地数町 歩を害し、川欠け或いは荒地となる」(『岐阜県災異誌』)

という水害があった。

翌文化九年(一八一三)にも大洪水があった。とりわけ牛道川

の被害が大きかった。

「七月晦日夜暮六後より夕立雨……スミ川一七八年目洪水、
切立二而家流、佐七惣吉二軒、佐右衛門小屋共二三軒なり、河
部村二而五軒家流る、牛道黒河洪水、為真村田畑多流、嶋万場
村野口より水入示後下新田迄流候由、口神路村ノ上ヨリ水入神
路川迄平押……七月晦日洪水牛道ハ前代未聞之水、所々大
木流る、中西村氏神之村淵之上岩之出張ニ御鍛堂とやら一社有
水湛へ、岩破社流る、右社屋根は越佐村に流上り、神は三日市
村ニ上り有之候而貫来候由、飛州高山橋も詰崩落候由、白川も
洪水」(元隆日記)

続く文化一〇年六月二十八日にも

「上之保川氾濫し、郡上郡西川村、島馬場地内堤切入り、田畑・
家屋を流出す」(『岐阜県災異誌』)
という水害があった。

文化一二年(一八一五)一月二十一日、大地震があった。

「夜四ツ二なるころ古今未曾有之大地震、御堂卓之香炉落、足
落る、なんでも四ツより朝六ツ迄数度しん、其間も始終ふら々々
世界中ウゴクヤウナココロモチ致候ナリ、其後も日々地震有之候」
(元隆日記)

痘瘡の流行

この「元隆」日記に、北濃地域における痘瘡(天然痘)の流行
についての記事がかなり多くある。

本稿の対象とする文化文政年間という時期より以前のことであ
るが、天明元年(一七八一)の記事に、

「此年冬前谷二日町痘瘡風流」(『元隆日記』)

とあり、その九年後の寛政二年(一七九〇)にも痘瘡が流行し、
多数死者が出たことが記されているが、以下、「元隆日記」に記
録された文化文政年間の北濃地域における痘瘡の流行を見ること
とする。

文化二年(一八〇五)四月二一日、二日町七右衛門の子が六
歳で「痘ニテ死」とあるように、痘瘡で死去した。その後、七月
二六日、八月二日、八月六日、八月二七日、一〇月七日、一〇月
二五日、一〇月三〇日、十一月一七日(二人)、十二月七日、一
二月一九日と北濃地域において、悲願寺の門徒の範囲だけでも、
一二人が痘瘡で死亡している。いずれも子どもばかりである。
六年後の文化八年(一八一二)の暮から文化九年にかけて、ま
たも痘瘡が大流行した。

文化八年十二月一四日に干田野の源助の子が三歳で「痘瘡死」
して以後、一二月で三児が死亡した。

翌文化九年になると、一月に四人、二月に二人が死亡した。

四月には七歳の子どもが、

「二月十五日より痘瘡、三月廿二三日より腫氣煩段々重り四月

一日五ツ過死去」(同前)

という経過で死亡したのをはじめとして四月で五人、五月に六人、六月に一人、八月に四人、九月に五人、十月に五人、さらに十一月から十二月かけても六、七人が、痘瘡で死亡した。

わずか一年間で、二日町・歩岐島・前谷・干田野のうち、悲願寺門徒という限られた範囲で、実に四、五人の子どもが、痘瘡によって命を奪われたのである。

さらにその八年後の文政三年(一八二〇)八月から九月にかけて、またも痘瘡が流行し、何人かの子どもが死亡した。

この痘瘡の流行は、おそらく史料に残らない白鳥町の他の地域や郡上郡内の各村にもほぼ共通してみられたであろう。

江戸幕藩体制の矛盾の激化という背景のもと、武士階級による財政窮乏と慢性的な農村窮乏のなか、凶作・飢饉に苦しみ、伝染病に襲われておびただしい数の子どもが死んでいった当時の農村の状態は、まさに言語に絶するものであった。

「悲願寺元隆日記」は、文政六年(二八二三)、元隆が八六歳で死去した年までで終わっている。それ以後の痘瘡の流行については不明であるが、これまでの傾向からいえば、それ以後も、そして他の地域でも、かなり何度も痘瘡の流行に苦しんだことは容易に想像できるところである。

文政年間の災害

文政三年(一八二〇)、

「卯之冬大雪、壺丈式三尺積」(莊巖講執事帳)

と一丈二、三尺という大雪が降り、さらに同年、

「八月四日夜大風、五日昼大雪、同夜五ツ時大洪水出、前代未聞之事也、当寺田所水流多分有之也」(同前)

と大洪水があった。

文政四年八月には、

「上ノ保川沿い郡上郡歩岐島村・為真村・越佐村・名皿部

村で耕地数町歩を害し、下流武儀郡郡上川沿い前野村にて耕地を害し、または川敷となる」(『岐阜県災異誌』)

という水害があった。

文政六年の記事に、

「去年八幡宮ヶ瀬橋落候而去冬より掛かへ普請有之、当山二而も上より頼二而宮木三本伐、材木旧冬不残寄此節過半出来」(莊巖講執事帳)

とあり、文政五年に八幡町宮ヶ瀬橋が流失し、その再建のために、長滝寺からも宮木等を抛出している。

文政七年の記事に、

「去年十一月十五日京都東本願寺焼失、難火之由風聞也」

(同前)

と、前年の文政六年十一月一日における京都東本願寺お焼失が記録されている。

文政八年（一八二五）は、

「八月十四日昼八ツ半より七ツ過迄大洪水、前代未聞ノ水也、六年已然大水よりも八尺程も大きな由也、郡中水損夥敷、当寺田畑川除悉流損、当寺大門下へ川切替り候也、右豪潮尊者左登坂村村、水ニ而同所滞留、当寺より宝幢坊・少将兩人送りニ參、甚難渋いたし候也、当秋一統大凶年なり」（同前）

と、大洪水・大凶作の年であつた。この八月十四日の水害により阿多岐村は連年の窮乏に拍車をかけられ、翌文政九年に救済金の借用を藩に願ひ出ている。

この大水害については、『岐阜県災異誌』に、

「長良川上流上ノ保川沿い郡上郡歩岐島村・大島村・白鳥村

・徳永村・河辺村にて耕地數十町歩を害し、川欠け或は荒

地となり、下流郡上川沿い上田村・山田村・大原村・三戸村

にて堤長九百間を破り、流家八戸、被害耕地数町歩」

と記録されている。

『高鷲村史』には、この八月一四日大風水害により山ぬけがあり各地で川場の変わったところが多かつたこと、この年長滝村で全壊家屋十五軒、半壊家屋二十軒に及んだことが記されている。

文政九年には、

「三月ヨリ追々疫病ハヤリ、十二月時分迄二八人斗死、但シ

妙見垣内計ナリ。凡作方八分ノ世ノ中ナリ」（『万留帳』）

と疫病の流行があり、

文政一二年（一八二八）には、

「十一月十二日辰の剋より越後国大地震・身の毛もよだつ巖さなり」（同前）

と越後国大地震の記事があつた。この地震は「越後西条地震」と呼ばれるマグニチュード六・九、死者一六八一人の大地震であつた。

文政一二年（一八二九）、

「此時大雪、自冬至春ニ迄壺丈余、大屋根へはしごなく登候」といふ大雪が降つた。この大雪により、この年、

「二月十三日夜裏屋根なだれいで大キ損し、軒巾十七間上へ三

間余破失いたし、たる木・はね木不残折落」（同前）

と、

長滝寺の大講堂が損害を蒙つた。なおこの破損した大講堂屋根は、

翌年（文政一三年＝天保元年）六月から一二月までにほぼ修復された。

この文政一二年には、

「去秋大風ニ而西国筋津なミ所々へ来り、肥前・筑前・讃州・長州辺ニ而凡拾弍三万石海となるよしなり」（同前）

という西日本における津波の記事がある。この文政一二年には、

「ひかん過迄畑ニ雪有、麦四分一ほどくさるなり、凡雪高

六尺ほどふる。．．．四月廿日四ツ時に大地震いるなり。

・同月廿一日明け六ツ半時地震いるなり。．．．六月廿二

日 九ツ時過地震いるなり」〔万留帳〕

と地震の記事があり、さらに翌文政一三年にも、

「七月二日京都大地震、所々堂塔ついし（築地）破損、東本願寺御真影御門主様焼跡之新屋敷ニ而二日三夜之間御明被成候と申也」〔同前〕

と京都地震の記事がある。この京都地震は、マグニチュード六・四、死者二八九人の地震であった。

不発に終わった万場の炭鉱

佐藤 光 一

はじめに

先に郡上藩延宝騒動でお暇になった家老遠藤奎之助と明治期までの遠藤家代々の墓が群馬県高崎市にある事を知らせて下さった、同県藤岡市在住の中村茂氏（『郡上史談』第一三二号、平成二二年一〇月発行に紹介）から次の手紙と共に、写真の地図が送られてきた。

「御無沙汰しております。遠藤清兵衛（奎之助）ではお世話になりました。

さて、旧高崎藩士川合英夫家から文書寄贈の話があり調査を行っています。川合家は明治以後群馬県官吏となり、退職後、戦争中に高崎市にあった東部地方鉱山局に勤務しました。

この川合家資料の中に、郡上郡弥富村万場の「石灰試掘鉱区図」がありました。出願人は弥富村剣二八一の二番地加藤耕二、弥富村万場一六五八番地 寛安次郎の二名です。どうやら「剣」は佐藤様の居住地らしいことに気づきました。この図は高崎市に寄贈されても扱いに困るので、郵送しますから貰ってください

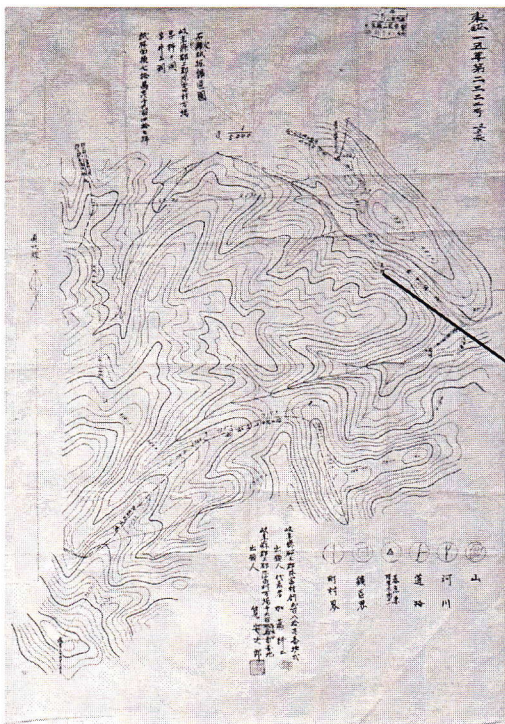
い。よろしくお願いいたします。」

私は万場に炭鉱があったことは全く知らなかった。早速大和町史通史編下巻（昭和六三年二月一五日発行）に当たってみたが、鉱工業の箇所には、「当村の鉱業は、碎石事業所が二、三あるのみである。」と記されているだけである。試掘とは言え、この炭鉱には一切言及していない。

一昨平成二二年一月、中村さんからこの鉱区図を頂いてからずっと気になっていたので、今回調べてみることにした。とは言え、何から何まで分らない事ばかりである。

石灰試掘鉱区図について

露頭（現場）



石灰試掘鉱区図 (75.0cm × 55.0cm)

① 鉱業権取得申請に付随したものである。

- ② 提出期日 昭和一五年七月一五日（受付日）
- ③ 場所 岐阜県郡上郡弥富村万場字柿ヶ洞、井上洞
- ④ 試掘面積 七〇一、九四七坪
- ⑤ 出願者代表 加藤耕二、出願者 笥安次郎
- ⑥ 提出先 東京鉱山監督局

⑦ 加藤耕二 弥富村助役（在任昭和九年二月～同十二年二月）、弥富村長（在任昭和二年四月～同二六年三月）、後岐阜県議會議員
 笥安次郎農業、地区の有力者

採炭の様子

試掘の場所は、試掘鉱区図にある「露頭」と一致するが、笥安次郎家の当主笥優氏に伺っても、それらしい資料は何も残されていないとのこと。試掘に加藤耕二、笥安次郎が関わっていたかどうかもわからない。試掘が何時から始まったかも定かでない。畑佐鉱山の関係者と思われる、今泉某が責任者として現場の指揮を取っていたが、勧進元は一宮の富豪で、その息子とかが現場に来ていたともいう。出炭は粗悪で売物にならず、炭油の採取など、いろいろ試みたようだが、うまく行かず、昭和二二年前、今泉某は最後の賃金も未払いのまま、逃げるように畑佐へ帰ったとのことである。現場で働いていた大中宏氏の話では、不払い賃金の支払い請求に畑佐まで押しかけたが、奥さんにしか会えず、せめてこれでもと、古い荷車を貰って帰宅したとの事である。

現地探訪

秋の一日、万場在住の大中宏、大中宏美、桑田洋一、三氏に案内をお願いして、現場を訪ねた。

長良川右岸に沿って走る、県道五二号線（白鳥板取線）を北進し、上万場の「大和斎場入口」の案内板で左折して柿ヶ洞道へ入る。およそ三八〇メートル進んで車を降り、左手の山道を井上谷（いのみだに）に沿って一〇〇メートル行くと、道は二つに分かれる。当時は一本で、そのまま進んだが、平成二年一月に竣工した砂防堰堤のため、行き止まりになった。道の一つは堰堤の迂回路である。迂回路を登ると、堰堤の上手に当時の選炭場を眼下に見下ろすことが出来る（写真）。



選炭場の右手の山に坑道が三本掘られていたと云うが、あちこち探したが、それらしいものは見当たらなかった。

写真奥手の左山裾に、現場の無事故を祈願するために、観音像が祀られていた。それが現在は井上智家にあるとのこと、後日井上家を訪ねた。

井上妙子さんの話

祖父（故井上政本さん）から聞いた話として、次のように話された。

現在の家の裏手に元の家があった。その頃は祖父が戸主であったが、その家に炭鉱関係者で、責任者らしい、ちよび髭をはやした今泉某と、ほかに二人止宿していた。事業の目処が立たず引き上げるとき、宿泊代の形にこの聖観音立像を受け取って下さいと置いて行った。その頃は御仏飯を供えるなど給仕をしていたが、その内に知り合いの者たちに勧められて、閉廟法要（いわゆるしん抜き）を勤め、美術品として大切に保管しているとのことである。

おわりに

中村茂氏から贈られた一枚の図面から、万場井上洞に計画された炭鉱に日を当てようと試みたが、残念ながら、これ以上の事は不明のまま第一先ず終らなければならない。

第二次世界大戦期の日本の総力戦体制の根幹となった法律「国家総動員法」の下で、資源の開発を試みたのか、或いは、一攫千金を夢見たのか、それすらも解明できない。ただ、一枚の「石炭試掘鉱区図」と一体の聖観音立像が遺されているのみである。



聖観音立像(正面) 高さ 86cm



聖観音立像(背面)

お願い

何か手がかりを得たいと思い、蛮勇を振るって、このような稿を試みました。お読みになって、お気付きの事がありましたら、ぜひ佐藤光一までお知らせくださいますようお願いいたします。

家系図を作ろう

河 合 利 雄

現在、私は三人の子（一男・一女）と五人の孫（四男・一女）に恵まれている。昨年、私が八十歳の傘寿を迎えたというので、お祝いの会を開いてくれた。

もし縁がなくて今の妻と結ばれていなかったとしたら、当然のことながら、こうした顔ぶれの集まりはないことだった。その後、縁あつて結ばれた三組の夫婦、それによる五人の孫たち、思えば全く不思議な縁での一つの血縁の成立である。私はそんなことを考えながら、集まったみんなの顔を見回していた。

面白いことに、親・子・兄弟・従兄弟（いとこ）たち、姿、形が何となく似ていることに気付いた。血の繋がりが（遺伝子）によるものだろう。

そうした集まりを原型にして、もっと拡大した集まりがみられるのが、結婚式とか葬儀などの親戚の集合の場であろう。これまでもあまり出会ったことのない叔父・叔母・従兄弟（いとこ）などに再会するのも、こんな場である。

こうした関係を図示したものが、家系図である。

両親があつての自分であり、そのまた両親の親はと遡って、単に十代遡るだけで千二十四人となり、それぞれの兄弟また子供などと数え上げれば、気の遠くなるほどの数になることだろう。

私はせめて曾祖父母の代まで位、遡って家系図の作成を試みたが、不明な点も多く、それでも百名を越える人にのぼった。子供たちからすれば、更に母方の親戚とも繋がりがあり、驚くほどの繋がりの数にのぼることになる。

これまで気づかなかつたが、連綿とつながるご先祖からの命の流れの一齣として、自分が在ること。よりよく生き、次へとバトンタッチしなくてはとの自覚と責任を痛感した。それに、互いに支え合い連帯し、絆を大切に日々を生きてゆくことの大切さ等、家系図作成の仕事は、いろいろ教えてくれた。みんなにも推奨したい。

更に、できればこの作成の過程の中で、明治以後で先祖たちが各時代をどのように生き抜かれたか、その喜びや悲しみを足跡として集録されることを勧めたい。古老の語るいろいろな話の中に、郷土の歴史の生き生きとした姿が、投影されているからである。

例えば、「戦争なんかには、何の大義もない、人間どうしの殺し合いで：」「あの頃は、秋になると年貢米を積んだ荷車が、たくさん村から、八幡へ続いたもんや。」色々なつぶやきは尊い。

文芸欄

短歌

命の誕生

井俣 初枝

握りこぶし 少年相撲土俵蹴る

勝者にうおーと こえの沸騰

光とは 常に影あり 小さな蟻に

初めて気づく 影の存在

新しき 命の誕生 今日もまた

声の花びら 病棟に満つ

光明を線に 背負いて 阿弥陀仏

半眼半歩 われに向いくる

群青の空に 新緑かがよいて

この季ときが好き 亡父ちちの復員

この谷に生きる

石神堯生

秋野菜剥くもの 干すもの 漬けるもの

聞いた話を思いつつ仕分ける

極寒を 耐えたか蠟梅ただ一輪

黄色あでやか 福寿草より濃く

庭先の 椿の葉群の 照り返し

チカチカ揺れて つむじ風吹く

ふるさととは 遠い記憶の中にある

棚引く夕日に 秋苗舞う

この谷に 生きねばならぬ 宿命の

子も階梯と 登りつつあり

志比の堂宮大工 大久保吉郎衛門

桑田 洋 一

曹洞宗開祖道元によって開かれた永平寺の、建造物を担当する専属集団の大工として、寺の支配下に大工村が形成されていた。道元が宋（中国）から伴ってきた玄盛繁（くろのじょうはん）を祖として成立したといわれている。寛延三年（一七五〇）、「境内水帳大工門前」、大工七一名、宝暦五年（一七五五）「大工門前四五軒」と記されている。優れた技術と余剰労働力が次第に永平寺以外の建築工事にも進出した。

郡上での記録

- 一 熊野神社拝殿（万場）、元禄四年（一六九二）、大工 越前しい佐助。長徳寺「年々諸見聞日記覚帳」より
- 一 宮ヶ瀬橋架替（八幡）、天保一二年（一八四二）、大工 越前しい也。「三番萬留帳」より。
- 一 白鳥神社本殿再建（白鳥）、嘉永五年（一八五二）、平成二〇年（二〇〇八）郡上市重要文化財指定。大工棟梁 大久保吉郎右衛門、彫刻師 立川彫り瀬川治助重光。
- 一 南宮神社本殿再建（万場） 嘉永六年（一八五三）三月（年は花火筒由緒による）、棟梁 大久保吉郎右衛門
- 一 洞泉寺鐘楼（八幡町 尾崎）、志比大工棟梁大久保吉郎衛門作と言われている、年号不明。
- 一 八幡大火にて消失。その後八幡町初音の大工西川省三氏により牛道橋諸光雲寺鐘楼と同様のものを再建した。
- 一 白山仲居神社本殿（石徹白）安政三年（一八五六）、永平寺町大工棟梁 玄之源左衛門、彫刻師、同地の後藤兼之助、立川富昌（七五歳）、立川昌敬 「白山仲居神社由緒」より。
- 一 円覚寺本堂（向小駄良）再建 安政四年（一八五七）、大工棟梁 大久保吉郎右衛門。大工の中に万場の稲葉惣吉氏の名あり。
- 一 南宮神社（万場）、棟札・泰正一位南大明神 明治八年（一八七五）、大工 越前国古田郡志比 大久保吉郎右衛門（建立物?）。
- 一 光雲寺鐘楼（牛道橋詰）、明治三二年（一八九九）

棟札・吉郎右衛門 八十五才。木鼻の彫刻は大久保作

作左衛門

一 南宮神社（万場）、拝殿再建 明治三十三年（一九〇〇）、

棟札・大久保吉郎右衛門代理 伊藤新左衛門。

（神社由緒には、吉郎右衛門養子 佐太郎とある）。

一 長滝白山神社、明治三二年の火災で全焼。その後拝殿は大久

保吉郎右衛門、拝殿の枡組格天井は大門米次郎と白石為

治郎、三島幸ら。このころ吉郎右衛門は高齢のため直接の

仕事はなされなかったようである。（『郡上歴史考』より。）

【付記】 筆者は大和町在住、神社建築に興味を持ち、郡上

市内にある志比の宮大工足跡を調べている。

私の戦争体験記
救護看護婦として

阿葉家 愛子

皆さんこんにちは、私は阿葉家愛子と申します。私はこのたび戦争体験について述べるように要請を受けましたが、私は戦争について、外部の方たち対象にしては一度も話したことがありませんし、ましてや大勢の方々向けにお話をしたこともありません。その上話し下手ですので、お見苦しいことと思いますが、恥を忍んで、私が赤十字の看護婦として招集され、戦地に派遣されて体験したことについて述べさせていただきます。

赤十字の場合、本社が東京にあって、全国各県ごとに支部があり、出身県の支部に所属します。

私は昭和十八年、高山赤十字病院の救護看護婦養成所を卒業しました。太平洋戦争の真つ最中で、卒業すると同期生は次々と招集され、戦地に、また内地の陸海軍病院に派遣されました。

私は岐阜支部に招集されました。本社の指示で、班が編成され、各人に召集令状が届きます。一個班は書記一名、婦長一名、看護

婦二十名、使丁一名、の二十三名です。昭和十八年十月三十日に招集され、十一月三日に四八七班として編成されました。

十一月三日岐阜駅出発、五日広島に到着し、他支部の班と合流して十個班でした。宇治港で輸送船に乗船し出航しました。行く先は知らされません。十二隻の船団でした。海は大変危険で、日夜潜水艦の見張りを救護班も交代でやりました。船内では毎日避難訓練をしました。ある朝、船団の一隻が、潜水艦に撃たれて撃沈しました。すごい音で私たちも驚いて、飛び起きて甲板に上がりました。

十二月一日、シシガハール昭南島に無事到着しました。ここで初めてビルマに行くことを知らされました。便があるまで南方陸軍病院の分院に補助勤務をしました。入院患者さんにビルマに決まったことを伝えると、「貧乏くじ引いたネ」と言われ、「激戦地で悪疫流行の地で、生きて帰れない、覚悟しなさい」とまで言われました。インパール作戦で白骨街道のことも知らされました。

十九年一月、昭南島出発し、任地に向かいました。海路は危険で駄目とのことで、陸路で列車とトラック輸送により、二月二十日、ようやくビルマの首都ラングーンに到着しました。その晩早速空襲があつて、防空壕に飛び込み、いよいよ戦地に来たのだと、身の引き締まる思いでした。三月一日トラックで任地に向かいました。三月五日、任地メイミョウに到着しました。伝染病棟勤務で、前任者と交代し、アマーバ赤痢とマラリアの合併で重病患者

さんばかりでした。

ビルマは乾期と雨期に分かれていて、三月は乾期で暑い毎日です。空襲は毎日必ずやってきます。出勤するとすぐ患者さんを防空壕に移動させ、夕方まで一緒に過ごしました。重病患者さんで歩けませんので、背負って壕まで運ぶのです。

患者さんは気をつかって、「看護婦さん、シラミがうつるから」と遠慮されます。私たちはそんなこと恐れていません。宿舎に帰って熱湯で洗うから、大丈夫と言って次々と背負って運びました。夕方空襲が終わった頃、病室に戻って夕食をして、便器交換を終えて、夜勤者と交代します。宿舎に帰って着物を替えると、着ていた着物はシラミが一杯です。それが日常のことでした。

昼間空襲のないときは、患者さんの汚れた衣類や毛布の洗濯です。私はその担当でした。爆音が聞こえてくると防空壕に飛び込んで、患者さんのそばにいました。雨期になると激しい雨降り、膝まで水がつく中を、隣の病棟との間を行き来して、日常の仕事をしました。一番大変なのは、便器交換です。アメリカ赤痢の患者さんは、一日に何十回も排便があります。一個ずつ便器を持っていては間に合いませんので、五、六人分ぐらい重ねて運んで始末しました。その間には、マラリア治療の注射をします。

夜間は二交代勤務です。一人で二棟受け持ちます。雨期になると草むらの中の建物ですから、膝まで水がつく中を、サンダルを

履いて、暗闇の中見回りにゆきます。空襲は毎日必ずやってきます。患者さんの容体を見ながら、夜間勤務につきました。明かりは空き缶に油を入れて、布を芯にして灯をともし使ったのです。雨で火が消えたら、そのまま手探りで仕事をしました。

特に便器交換が辛かったです。何人かの便器を便所に持って行って洗うのですが、暗闇の中転ぶこともありました。一日の勤務が終わって、宿舎に帰ったときの、同僚との言葉は、「あなたも今日も無事だったのか・・・」があいさつでした。婦長さんは宿舎の玄関に立って、各病棟から帰る看護婦を確認して、今日も無事でよかったです。夕食をしました。

乾期は夜も空襲があります。照明弾を落として、爆撃をします。夜半、防空壕へ何回も飛び込んで避難しますが、最後は疲れて寝ていることもあり、制服を着て靴を履いたまま、一晚中ベッドに横になっていました。

十九年も終わり頃になると、ますます戦況悪化し、部隊から遺髪を提出するように封筒が渡され、お互いに髪を切って入れて、本部に渡しました。その後しばらくして、今度はカプセルに入った青酸カリが各自一個と、手榴弾が二個各班に渡され、最悪の時の自決用でした。

ますます戦況は悪化して、毎日日中から機銃掃射に見舞われ、歩ける患者さんは軍医さんと衛生兵さんが誘導して、裏山に逃げましたが、重病患者さんは残されています。私たち看護婦が病室

へ飛んで行って、爆風の入らないように窓を閉めて、患者さんを守って病室に居ました。機銃掃射でパンパンと音が激しくなり続きます。私たちはなんとかしてこの患者さんを守らねばなりません。それが看護婦の使命です。患者さんが「自分たちはいずれ駄目になります。看護婦さんはまだまだ働いてもらわないといけないから、早く逃げてください。」と言われました。「私は大丈夫どんなことがあってもここにいます。」と返事すると、患者さんは「すみません」と涙を流して言われました。少しは安心してくださるのではと思えました。いかなる場合でも私たちは患者さんを捨てることは許されません。無事に銃撃が終わってホッとしました。

メイミヨウ到着以来、毎日空襲が続きました。雨期に入ると空襲がないので一時ほっとします。アメーバ赤痢の特効薬エメチン注射も病院には全くなって、治療の方法もありませんでした。エメチンさへあれば多くの患者さんが苦しむことなく回復したのに、多くの患者さんが次々と亡くなられるのは、とても悔しく辛いことでした。前線から送られてくる重病患者さんが多くなり、重病棟で八十名以上の患者さんを受け持つことになり、少ない看護婦で、夜勤も一人ずつが準夜、深夜と受け持ったのです。一晩中大きな釜に湯を沸かして、各自の水筒に入れて、湯たんぽ代わりにしていました。全員アメーバ赤痢を併発していて、頻繁に下痢で腹痛を伴い、苦しさを少しでも緩和できればとの処置でした。

見回りの時間に、廊下を歩く音を聞きつけ、あちらこちらから

苦しそうに呼ばれるので、ベッドに近づくと、「苦しい、注射を」と消えるような声で言われます。「今注射しますから」と強心剤を打ちますが、それだけの処置をするのが精一杯でした。その間にも少し元気な患者さんが、「看護婦さん、隣の人が先ほど亡くなったようだよ」と知らせてください、行ってみるともう呼吸が止まっていました。苦しかったでしょうに、申し訳なく辛い思いでした。

このような患者さんが、一晩に何人かありました。なくなられた方は、病室から運び出して、死後の処置をして、霊安室に運びます。みな私たちですのです。一人で外で処置するのが辛いので、深夜勤務の人と二人で体を拭いて、残された持ち物を整理して、少しでも着られる衣類があれば着替えて、毛布にくるんで外の霊安室まで運びます。外は真つ暗闇一寸先も見えず、広い原っぱに二人つきり、だれもいません。帰りは一目散に駆けて病棟まで戻りました。

荷物を整理して内地に発送してもらうため、部隊の事務所に届けることになっていましたが、十九年の終わりには、もう戦況最悪状態で、日本に届くのか心配しながら整理しているとき、内地のご家族の写真や手紙が残されていて、とても辛く胸が痛む思いでした。友達と二人で、思わず涙することもあって、帰りを待つておられるご家族のことを偲びながら、整理することもありました。

十九年末になり、今までの場所は危険になり、離れた山の中に移転しました。山の斜面にベッドなどはなく、土の上に毛布を敷いただけでした。そこに寝かされていましたが、乾期で雨は降りませんでした。資材が何もなくて、野戦病院と同様でした。食料も乏しくて、毎日のご飯は、粉（もみ）が多くて粉を取りながら食べました。それでもいただけるだけ良いと思いました。私たちは健康ですけど、患者さんにはとうてい食べられるような食事ではありません。給食係の兵隊さんも、辛かろうと思いました。副食は一日に梅干し一個です。種は捨てないで、次の食事のおかずにするのです。

山の斜面を、便器や尿瓶をもって処理するのです。敵が近づいてくるので、長くはおられず、とうとうメイミヨウも危なくなり、二十年二月初旬ころ、カローというところの兵站病院に転属になり、メイミヨウを脱出しました。

このころメイミヨウでは、既に遺髪も部隊に提出し、各班にはカプセルに入った青酸カリと、手榴弾二個が最悪の時の自決のため渡されて居ました。

脱出も昼間は危険で行動できませんので、山中に避難し、夜間にトラックで無灯のまま走り、敵襲を避けながら、暗闇の道を輸送していただきました。

二月十一日カロー到着。百二十四兵站病院の重傷病棟勤務でした。七名で受け持ち、本院と遠く離れていて、松林の中のニッパ

ヤシで作った病棟でした。ここに来てますます戦況悪化で、毎日激しい空襲と機銃掃射です。もう衛生材料はなく、何も出来ません。ただ便器交換と傷口のウジ虫を取るだけでした。

自分たちの食事も、軍医さんに「五分で食え、患者が死んでしまふ」と怒鳴られながら、ご飯に汁をかけて、立って数分で食べ終わる状態でした。毎日の激しい空襲で危険なので、松林の中のニッパヤシの小屋におられなくて、朝早くから、なんとか歩ける患者さんに、昼食のおにぎりを持って、衛生兵さんと看護婦何人が付き添って、遠くの間山へ避難するのです。敵スパイのため一日として同じ場所に避難できませんでした。医師の診察も山中で行われました。

私は重病者担当で、二人ぐらいが残って、留守番をしました。残りの患者さんを、担架で林の中の木の陰などに運び、そこで付き添っていました。

カローに到着してすぐに、病棟に出動すれば、朝早くから大砲の打ち合う音が聞こえ、昼間は機関銃の音が絶え間なく聞こえる中で勤務し、明日の命もわからない日々でした。あまり近くで銃声が聞こえるので、兵隊さんに聞きましたところ、「あれはもう一里半ぐらいでの戦闘」と言われ驚きました。患者さんに「看護婦さん、早く逃げないと前の道路を敵の戦車が走るようになる」と、言われました。

当時の日本軍は、多くの患者さんを抱えて、看護する衛生兵さ

んもなく、ビルマに残っている救護班に、退却の命令を出さなかつたと、後で知らされました。私たち救護班は、何も知らなくて、毎日命令のないまま怖い思いをしながら、懸命に働いていました。

ある日、前線から患者さんが護送されてくるので、看護婦全員病棟に来るよう連絡がありました。十時頃でした、皆ようやく床につこうとした頃でした。激しい雷雨です。頭に頭巾を巻いただけで、激しい雨の中、病棟に走って行きました。暗闇の中、病棟につくと、大型のトラックが到着していました。患者さんを降ろしているところでした。病棟にベッドはないので、林の中にどんどん降ろして、帰ってしまいました。動くことも出来ない外科の患者さんでした。

土砂降りで激しい雷の鳴る雨の中、ずぶぬれの患者さん、灯りはありません。稲妻が光る中で、患者さんを見つけて、担架で運ぶのですが、あまり多くてどうにもなりません。暗闇の中つまずいて転びながら、患者さんに声をかけながら、居場所を探して、二人で担架を運ぶのは無理なので、背負って小屋まで運びました。雨はますます激しく、水が頭から滝のように流れるので前が見えません。土手を登るとき、滑って転んで、外科の患者さんで足を骨折している方が、「痛いっ」と悲鳴をあげられて、「ごめんなさい」と謝りながら、小屋に収容しました。

激しい雨の中、何時間が過ぎたのか、松林の中を走りながら、残っておられる患者さんがいないかと、声をかけて確認して回り、

ようやく宿舎に戻ったときは、もう明け方でした。ずぶ濡れの体で衣服を着替えると、もう出勤時間になっており、病棟へ行き、昨夜の雨で亡くなられた方がないか、松林の中を探しました。朝食をおむすびにして、粉みそをかけて、それを持って探したところ、もう既に息が切れておられる方があり、本当に申し訳なく悔やみました。病棟に運び、死後の処置をして、埋葬しました。

その当時は戦況悪化で、火葬は出来なくなりました。煙が出るに敵に見つかりますので、土葬しました。衛生兵さんが少なくて手伝ってもらえないので、私たち二人できれいに拭いて、毛布にくるんで、裏山に運んで自分たちで穴を掘って埋葬しました。遺骨を残すために、小指を衛生兵さんに切ってもらって、小さな缶で焼いて、名札をつけて、遺品と一緒に部隊の発着部に届けてもらいました。果たしてご遺族の元に届いたのかわかりません。埋葬する穴を掘るときに、同じ場所を掘らないようにと、小さい木を頭の方に植えて、目印にしました。あの方たちは、遺骨収集もなく、今もあの場所に眠っておられるのかと思い、埋葬したときのことを、忘れることは出来ません。

カロリーも危険になり、患者さんの脱出の指示が出ました。ある日患者さんをトラックで脱出のため朝送り出して、これで重病患者さんだけになり、衛生兵さんたちが「僕たちが責任もって守るから」と言ってくれました。これで安心して脱出できると思いい、準備していたところ、夕方になって帰ってきたトラックに全員

乗っているのでびっくりしました。聞いてみると、途中敵に囲まれて、とても進めなく戻ってきたと言われました。いよいよ徒歩でしか脱出できず、歩ける患者さんから、カルテルを持って脱出することに、重病患者さんだけ最後に残りました。

私たち赤十字の救護班は、患者さんを残して脱出することはできませんが、ようやくビルマに残された救護班にも、脱出の命令が出されました。残された患者さんは、軍医さんと衛生兵だけで守るから、看護婦さん早く逃げなさいと言ってくださって、ようやくカローを脱出しました。

四月半ばの夜中に、自動車で出発し、昼間は危なくて走れず、無灯火で夜間走り、数日後雨の中、夜に兵站病院に到達し、数日過ぎました。建物はなく、野宿で、背中のをしたを雨水が流れて、寝ていられず、荷物を濡らさないように抱えていました。患者さんも林の中に毛布だけの病床で、雨期で水が溜まって濡れた毛布の上に、寝かされていました。重病患者さんは汚物にまみれ、傷口をふさぐ包帯もありませんでした。

私たちは半数が勤務、半数がびんで糶（もみ）をとる仕事でした。食料は乏しく、夜は一里も二里もある部落へ、糶を取りに兵隊さんについて、暗闇の中出かけました。道もなく皆にはぐれなように急いで歩くのが精一杯でした。土民兵に見つかつたら、終わるのです。衛生兵さんが、銃を持って前後を護衛してもらって歩くのがやっとでした。糶の徴収に行くのですが、徴収と言う

より戦火のため住人が逃げた民家で、糶を手に入れる泥棒です。ついでに干してあるトウモロコシの種を、固くて食べられるようなものではないけれど、それでも一時空腹を満たすため、かじりました。翌日こめかみが痛くて、口が開けられませんでした。

ある時、給食の兵隊さんが、今日は茶碗蒸しだと言って、何かと思つたら、インゲンのみそ汁で中身は虫が一杯でした。建物もなく露天の炊事場で、雨水の味噌汁です。それでも食事をいただけるだけ幸せでした。ここにも長く置いてもらえず、また移動です。

ある日川を渡ってバナナ林につきました。草屋があり自分の住家と定められました。いよいよ全員脱出の行軍の時が迫りました。タイ国のチェンマイまで行くことになりました。チェンマイに出るには道が二つで、南路と北路があり、南はとても悪路で危険、北は土民兵が居て、危険とのことでした。結局南路に決まりました。五月下旬から、行軍に備えて毎夜荷物整理でした。背負えないものは全部焼き捨てました。食料の米と塩と着替えとを用意し、制服は最後の時これを着て終わろうと皆約束して大切に持つて歩きました。

行軍が近づき、しばらく休憩した草屋の前に、六個班が整列し、東の空を遙拝し、『海ゆかば』を合唱しました。行軍に出発して数日間は、毎日二〜三里と山路をゆっくり歩き続けて馴らし、二十里の山坂を越えました。

米も残り少なくなり、わずかな荷物と米と交換して、なんとか食物を得ました。

雨期は半年続き、行軍中は毎日雨の中で、滝のように流れる水に、杖を頼りに転ばないように必死に歩きました。小休止の音が聞こえると、皆その場に座り込んでしまいます。歩く時も兵隊さんが、流されないように気をつけると常に注意してくださる。見上げるような高い坂、綿のように疲れた体は、立っていることが出来ず、流れる水の中に、座り込んでしまい、そうすると眠ってしまいます。

「出発」と大きな声に目覚めて、足を見ると、ヒルに吸われて血だらけになっていました。それを防ぐ力もないのです。滑らないように気をつけても、すってんころりんと転び、せっかく上った坂道を滑り落ちてしまいます。マリアの熱でふらふらの体です、皆泣きながら必死に上りますが、友達に手を引っ張ってもらい、後ろからお尻を押ししてもらって、やっと坂を上ったこともありました。

坂道を下るときは、何度転んだかわかりません。山を降りれば大河を渡らねばならないし、雨期で増水し濁流が怖い河です。腰から胸までの深さで、兵隊さんが両方の端で、太い綱を持って河の途中でも何人かの方が、綱を持っていくくださり、私たちはその綱につかまり、杖をつけて命がけで渡ること、一日に十五〜六回でした。いつも「流されないように気をつけよ」と、兵隊さん

が注意してくださった。

時々激しい雨降りで、増水して危険で渡れず、川のそばで雨宿りしたこともありました。一晚中雨で、テントのみではどうも寝ることは出来ず、荷物を濡らさぬように抱えて、飯盒に腰かけて、大きな木の下で雨を避けて夜を過ごしたこともありました。川の中には何が居るかかわからず、怖い思いでした。

次の日また、見上げるような高い山です。ドーナ山脈で、二、八〇〇メートルと言われる険しい山で、下れば今度はジャングルで、人の通れる路はありません。

以前、行軍の途中カローで私たちより先に山越えに向かった患者さんたちが、山の登り口のところで何人も倒れており、もう虫の息でした。私たちが通りかかったとき、「水・水」と言われて駆け寄って声をかけても返事も出来なくて、息はあるのに鼻や目に赤蟻が行列を作っていました。そばには軍馬が沢山死んでいました。患者さんに水をあげたいと思っても、兵隊さんが、「自分が駄目になるよ、心を鬼にしろ」と叱られて、後ろ髪を引かれる思いで、立ち去りました。

険しい山中で、自分の身がやると動かせるような毎日、雨の中の行軍で、どうして助けてあげられるのかと、救護看護婦なのに、患者さんを捨てていく心苦しさを、どうすることもできませんでした。

野宿しながら、毎日道々に倒れて息絶えている患者さん、木に

もたれて見えるので駆け寄って声をかければ、既に亡くなっている方など多くありました。

三、四人ぐらいつつ、雨の中で座っていて、遅れるので「一緒に頑張つて歩きましょう」と声をかければ、食料も何も持たなくて歩けない状態で、「後から行きます、先に行ってください」と言われる。みんなもう疲れて歩けないのです。「後からきつと来てください」と声をかけるのが精いっぱいでした。このような状態を沢山目にして、本当に辛い思いでした。

【白骨街道】と言われるあの行軍の道です、まざまざと見た生き地獄です。深い山中に置き去りにされた人々に、一日に何人か出会いました。

十五日間の、厳しい死の行軍と言われた山越えを終わるころ、遺体收容に行かれるという話を聞きました。大変な山道で、ご苦労なことですが、せめて全員收容されるようにと、祈りました。険しい山道で、立って歩けないので這って通るように言われました。右は急な険しい山、左は深い谷底で、落ちたら再び這い上がることは出来ない危険な場所です。常に兵隊さんに注意されながら通りました。命がけでした。

六月下旬、チェンマイ航空隊からトラックで迎えに来てくださって、夕方チェンマイに着きました。全員栄養失調で、マラリアを発熱し、一ヶ月の休養をさせていただきました。

七月下旬、チェンマイ出発し、八月タイのバンコックに到着し、

ここで護送してくださった兵隊さんとお別れました。またこの道を引き返して、本隊に戻れるとのことでした。ありがとうございました。

救護看護婦にビルマ脱出の命令を出してくださいあったある上級軍医さんが、看護婦はチェンマイ到着までには半数は死ぬだろうと言われ、護送隊長の軍医さんも半数は死ぬと覚悟していたと言われましたが、幸い看護婦は全員無事にチェンマイに到着しました。

八月十五日、ハノイに向けて出発と言われ、トラックで迎えにきてくださった。このとき、自動車隊の方が、「日本負けたの知ってますか」と言われてびっくりしました。

バンコクの駅からベトナムに向けて、汽車で出発する。ここで馬を下した直後の馬糞のいっぱいある貨車に乗るように言われ、皆で掃除してアンペラを敷いて乗車しました。窓もなく馬糞の臭いで吐き気が出るほど苦しかったので、負けたらこんなになるのかと、皆悲しく思いました。

八月十九日、サイゴンに到着、その後陸軍病院のシヨロン分院に勤務となりました。

白衣がないので、病院で白い布をもらい、病院つきの縫製をする男性の方がおられたので、その方に依頼して、みんなが帽子と白衣を縫っていただき、ようやく勤務に着きました。受け持ちは結核病棟でした。私たちは、次々とマラリアで発熱し、毎月一回

定期に発熱して、毎日二、三人は寝ていました。寒気が出るまで出勤します。寒気が治まると、四十度以上の高熱が出て、意識もなくなるほど辛く、それが夕方まで続きました。三日熱の場合は一日おきに発熱して、一週間で直ります。

終戦後弾丸に見舞われることはないと思いましたが、私たちの宿舎の屋根に、カチンカチンと弾丸が飛んでくるのです。流れ弾が怖いので、当たらないように気をつけよと兵隊さんに注意されました。あの時始まった戦争が、その後ベトナムで続いていたのです。夜勤していても、近くで施設を爆破する音がすさまじくて、恐ろしい思いでした。元気な患者さんが、事務所へ飛んできて、「看護婦さん伏せろ」と注意してくださいました。宿舎から三メートルぐらいしか離れていないところで、弾丸がヒュンヒュン音がして、飛んできました。私たち日本が相手ではありませんが、怖い思いでした。

一ヶ月ぐらいは食料もありましたが、進駐軍が入ってから、食料も乏しくなりました。あるとき、進駐軍から、一晚に五〇〇枚のマットレスを作れと指示されました。勤務者と病人以外、全員でマットレス作りをさせられました。男の方が、マットレスに綿を詰めて、私たちは口を閉じる作業です。固い布で大変でした。終わったのはもう明け方でした。進駐軍監視下の抑留生活でしたが、日本に帰れるまでとはがんばりました。

終戦翌年の昭和二十一年一月、サンジャックに到着、第四百十

九兵站病院勤務。五月九日、サンジャックから乗船し臨時病院船に勤務。五月十七日、広島大竹港到着。五月十八日上陸で、病院船勤務解除となりました。

下船と同時に、アメリカ進駐軍が、パラチフス予防のために、南からの帰還者に、その場でDDTを、頭から体中にかけてくれました。この時、日本は本当に負けたのだなど、みじめで情けない思いでした。

あの戦争で、多くの将兵の方々が、むごい死を遂げ、尊い命を亡くされました。皆もう一度故国日本の地を踏みたいと願って、戦っておられたと思います。

あの戦争のことは、生涯忘れることは出来ません。私たちは幸いに多くの方々を守られて助けられ、九死に一生を得て、二年七ヶ月を経て、再び日本の地を踏むことが出来ました。こうして現在も無事に、生かさせてもらって居ることに、いくら感謝してもし尽せません。

【付記】この記録は、大和町在住の筆者が、従軍看護婦としてビルマ（ミャンマー）に派遣された時の体験を、「郡上市戦没者追悼式」で講演したものです。

語り継がれてきたものがたり 郡上につたわる昔話・伝説目録

瀧日 千代美

2012(平成24)年は、日本の民俗学の創始者、柳田国男の没後50年にあたります。明治43年の『遠野物語』の発刊からは、すでに百年余が過ぎました。祖父母や親や身近かにいる大人たちから昔話を聞き、子どもたちに伝えてゆくことはほとんどみられなくなりました。昔話は“伝承文化財”とも“文化遺産”ともいわれています。

現在の昔話の伝承は、書きとめられた文字資料によって家庭や図書館、公民館、学校などで伝えられています。もともと昔話は、書かれた文字ではなく、耳で聞いて口伝えで、長い間伝承されてきた伝統文化です。語り継いできた人々の心や感情、町や村の歴史が込められています。そして聞き手の子どもたちは今もおり、語り手になる子どもたちがいます。最近では、親やボランティアが学校で読み聞かせをしたり、記録された昔話を覚えて生の言葉で語る新しい語り手たちも増え、活字を通して語り継がれています。

この目録は、郡上の風土で育まれた昔話や伝説や土地ことばが、多くの子どもたちや大人に受け継がれてゆくことを願い作成したものです。

【凡 例】

◇この目録は、1960(昭和35)年から2004(平成16)年までに記録・再話された郡上の昔話・伝説に関する目録である。

◇記載順序は、番号・掲載開始ページ・題名・伝承地の順である。

◇目録の作成にあたっては、以下の資料を対象にした。

- 『郡上むかしむかし』 木島泉著 (郡上史談会) 1975
- 『母袋むかしむかし』 1・2 木島泉著 (母袋総合開発 島崎増造) 1976
- 『これでちょっぴりきのこっば』 白鳥町役場 (白鳥町) 1984
- 『ふるさと高鷲 辛夷の記』 上村彰隆 (上村彰隆) 1999
- 『和良の民俗』 昭和53年度調査報告 猪岡洋編 (東洋大学民俗研究会) 1979
- 『わらむらにのこる民謡と昔話』 和良村教育委員会編(和良村教育委員会) 1996
- 『ふるさとのむかしばなし』 那比公民館 (那比公民館) 1992
- 『小駄良の民話』 井上正道・森政治編再話 (川合小学校) 1973
- 『郡上の昔話・昔の話』 和田昌三編 (一つ葉文庫) 1991
- 『郡上の伝説』 加藤一男著 (加藤一男) 2004
- 『古今伝授の里 やまとの伝説』 加藤一男著 (加藤一男) 2002
- 『美濃の昔話』 日本の昔話16 稲田浩二編 (日本放送出版協会) 1977
- 『美濃の民話』 第一集 赤座憲久編 (未来社) 1973
- 『美濃の民話』 第二集 赤座憲久編 (未来社) 1977
- 『郡上八幡町史』 下巻 八幡町役場 (八幡町) 1961
- 『大和町史』 通史編下巻 大和町 (大和町) 1988
- 『白鳥町史』 通史編下巻 白鳥町教育委員会 (白鳥町) 1977
- 『美並村史』 通史編下巻 美並村教育委員会 (美並村) 1984
- 『明宝村史』 通史編下巻 明宝村教育委員会 (明宝村) 1993
- 『高鷲村史』 山川新輔 (高鷲村役場) 1960
- 『美濃と飛騨のむかし話』 岐阜県小中学校長会編(岐阜県小中学校長会) 1968
- 『続・美濃と飛騨のむかし話』 岐阜県小中学校長会編(岐阜県小中学校長会) 1970
- 『読みがたり 岐阜のむかし話』 岐阜児童文学研究会編 日本標準 2004
- 『岐阜の伝説』 岐阜児童文学研究会編(日本標準) 1978
- 『ふるさと八幡』 八幡町教育委員会編(八幡町教育委員会) 1974
- 『わたしたちの岐阜県の伝説』 後藤時男(大衆書房) 1972
- 『柳田国男未採択昔話聚稿』 野村純一編 (瑞木書房) 2002
- 『岐阜県の民話』 日本児童文学者協会編 (偕成社) 1981
- 『子どもの版画・絵本 ぎふのむかしばなし』 下呂小学校制作 (あい書房) 1978
- 『日本の伝説 8 東海』 日本伝説拾遺会編 (山田書院)
- 『奥美濃よもやま話』 金子貞二 (奥美濃よもやま話刊行会) 1971
- 『白山麓 石徹白の歴史と民俗』 石徹白忠 (石徹白忠) 1999
- 『白山麓 石徹白拾遺録』 石徹白忠 (石徹白忠) 2002
- 『いとしろの昔話 石徹白鼎翁手記「無碍の花」』 上村俊邦編 (上村俊邦) 2013

『郡上むかしむかし』 木島泉著 (郡上史談会) 1975

| 番号 | 掲載開始頁 | 題 名 | 伝 承 地 |
|----|-------|------------------|--------|
| 1 | 8 | 権兵衛の八卦 | 八幡 小野 |
| 2 | 14 | 桶屋のきつね (1) | 白鳥 |
| 3 | 18 | 桶屋のきつね (2) | 白鳥 |
| 4 | 20 | 中西すっこんこん (1) | 白鳥 |
| 5 | 23 | 中西すっこんこん (2) | 白鳥 |
| 6 | 26 | 三ざのむすめ | 白鳥 中西 |
| 7 | 31 | 女池の大蛇 | 白鳥 那留 |
| 8 | 36 | 日本一の屁こき爺 | |
| 9 | 40 | 天狗のこぶとり | 八幡 那比 |
| 10 | 45 | 豆栗橋 | 大和 |
| 11 | 49 | きつねとたぬきとかわうそと | 大和 |
| 12 | 52 | 薬師のきつね | 大和 |
| 13 | 55 | 山のこ 一分負けた | |
| 14 | 56 | 山のこ 鼻がのびた | |
| 15 | 58 | 踊り猫 | 白鳥 |
| 16 | 60 | きつねの豆炒り | 白鳥 那留 |
| 17 | 62 | 百市 | 白鳥 |
| 18 | 64 | がわろの話 | 白鳥 |
| 19 | 66 | 切れもの | 白鳥 |
| 20 | 68 | かいもち | 白鳥 |
| 21 | 69 | があらう (1) | 白鳥 |
| 22 | 71 | 瓜姫小女郎 | 白鳥 |
| 23 | 72 | 欲ばりな話 | 白鳥 |
| 24 | 73 | 原口城 | 白鳥 |
| 25 | 78 | 宝曆義民後日談 | |
| 26 | 82 | およしのこと (1) | 八幡 |
| 27 | 86 | およしのこと (2) | 八幡 |
| 28 | 91 | およしのこと (3) | 八幡 |
| 29 | 95 | 弘法大師と小豆がゆ | 白鳥 |
| 30 | 99 | 宗祇柿 | 八幡 |
| 31 | 102 | ふしぎ谷の話 | 大和 |
| 32 | 105 | 西根の大蛇と村間池の大蛇 | 大和 |
| 33 | 107 | 石仏 | 八幡 |
| 34 | 109 | 高賀山の鬼 | 八幡 |
| 35 | 111 | ふくべが淵 | 石徹白 |
| 36 | 113 | 明智岩 | 八幡 |
| 37 | 114 | 浄安杉 | 白鳥 石徹白 |
| 38 | 116 | 八百比久尼 (1) - たかはし | 八幡 |
| 39 | 117 | 八百比久尼 (2) - 杉原の石 | 八幡 |
| 40 | 118 | おつね岩 | 大和 |
| 41 | 119 | 博覧会道中記 | 白鳥 |
| 42 | 136 | きつねの火 (1) | 大和 |
| 43 | 139 | きつねの火 (2) | 大和 |
| 44 | 149 | きつねの火 (3) | 大和 |
| 45 | 141 | きつねの火 (4) | 白鳥 |
| 46 | 142 | きつねの火 (5) | 大和 |
| 47 | 143 | きつねの火 (6) | 白鳥 六ノ里 |
| 48 | 143 | きつねの火 (7) | 白鳥 石徹白 |
| 49 | 169 | があらう (2) | 明宝 |

『母袋むかしむかし』 1 木島泉著 (母袋総合開発 島崎増造) 1976

| 番号 | 掲載開始頁 | 題 名 | 伝 承 地 |
|----|-------|-----------|-------|
| 1 | 3 | 池仏さま | 大和 母袋 |
| 2 | 4 | 巡礼が滝 | 大和 母袋 |
| 3 | 5 | 檜岩 | 大和 母袋 |
| 4 | 6 | くろ淵 | 大和 母袋 |
| 5 | 7 | たけ淵 | 大和 母袋 |
| 6 | 7 | ごん助屋敷 (1) | 大和 母袋 |

『母袋むかしむかし』 1 木島泉著 (母袋総合開発 島崎増造) 1976

| 番号 | 掲載開始頁 | 題名 | 伝承地 |
|----|-------|-------------|-------|
| 7 | 8 | ごん助屋敷 (2) | 大和 母袋 |
| 8 | 10 | 治太郎御殿 | 大和 母袋 |
| 9 | 13 | みょうかん淵 | 大和 母袋 |
| 10 | 14 | 母袋よぼし | 大和 母袋 |
| 11 | 15 | ぼたもちまいれ | 大和 母袋 |
| 12 | 16 | おばれたぬき | 大和 母袋 |
| 13 | 19 | やれやれうれしや一の枝 | 大和 母袋 |
| 14 | 21 | スズメトケラ鳥 | 大和 母袋 |
| 15 | 22 | 米福ぬか福 | 大和 母袋 |
| 16 | 23 | カワウソとサルとウサギ | 大和 母袋 |
| 17 | 26 | 大きな足 | 大和 母袋 |
| 18 | 28 | めしくわん嫁 | 大和 母袋 |
| 19 | 31 | 蛇むことひょうたん | 大和 母袋 |
| 20 | 34 | いが栗の雨 | 大和 母袋 |
| 21 | 36 | 大きな大きな鏡もち | 大和 母袋 |
| 22 | 39 | 日本一のなまけもの | 大和 母袋 |
| 23 | 43 | あかの丸薬 | 大和 母袋 |
| 24 | 45 | アジラの化けネコ | 大和 母袋 |
| 25 | 46 | 日本一のへこき | 大和 母袋 |
| 26 | 48 | 泣かせ猫 | 大和 母袋 |
| 27 | 51 | 無間の鐘 | 大和 母袋 |

『母袋むかしむかし』 2 木島泉著 (母袋総合開発 島崎増造) 1976

| 番号 | 掲載開始頁 | 題名 | 伝承地 |
|----|-------|-------------|-------|
| 28 | 3 | 平家と母袋の地名 | 大和 母袋 |
| 29 | 8 | 比久尼寺 | 大和 母袋 |
| 30 | 9 | 比木寺のりょうぶ | 大和 母袋 |
| 31 | 10 | 栃本の目ぐすり | 大和 母袋 |
| 32 | 11 | 牛の糞岩 | 大和 母袋 |
| 33 | 12 | 治太郎御殿 | 大和 母袋 |
| 34 | 15 | ふたつの白山神社 | 大和 母袋 |
| 35 | 17 | ほろやのこと | 大和 母袋 |
| 36 | 18 | 盗人畑 | 大和 母袋 |
| 37 | 19 | ごんすけやしき | 大和 母袋 |
| 38 | 21 | 母袋の火事 | 大和 母袋 |
| 39 | 23 | 池仏さま由来 | 大和 母袋 |
| 40 | 26 | 消えずの照明 | 大和 母袋 |
| 41 | 30 | 母袋よそご | 大和 母袋 |
| 42 | 35 | ふみだしの名号 | 大和 母袋 |
| 43 | 38 | 坊主だぬき | 大和 母袋 |
| 44 | 39 | チンチンカラカラ | 大和 母袋 |
| 45 | 41 | かいもちだぬき (1) | 大和 母袋 |
| 46 | 42 | かわうそ | 大和 母袋 |
| 47 | 43 | てんぐ | 大和 母袋 |
| 48 | 44 | 大もっけい小もっけい | 大和 母袋 |

『美濃の昔話』 日本の昔話16 稲田浩二編 (日本放送出版協会) 1977

| 番号 | 掲載開始頁 | 題名 | 伝承地 |
|----|-------|-----------|--------|
| 1 | 112 | しっほの釣り | 大和 剣 |
| 2 | 113 | ふくろうの紺屋 | 大和 洞口 |
| 3 | 114 | 雀孝行 | 大和 小間見 |
| 4 | 115 | 猿蟹合戦 | 大和 剣 |
| 5 | 118 | カチカチ山 | 大和 徳永 |
| 6 | 119 | 猿と蛙の餅争い | 大和 剣 |
| 7 | 120 | 兎の拾い物分配 | 大和 大間見 |
| 8 | 121 | 助十郎とゴンスケ狸 | 大和 上栗巣 |
| 9 | 124 | 爺と狸 | 大和 徳永 |
| 10 | 125 | 狐と男 | 大和 名皿部 |

『美濃の昔話』日本の昔話16 稲田浩二編（日本放送出版協会）1977

| 番号 | 掲載開始頁 | 題 名 | 伝 承 地 |
|----|-------|------------------|--------|
| 11 | 127 | しらが平の婆餅 | 大和 上栗巢 |
| 12 | 130 | 狸と焼け石 | 大和 下古道 |
| 13 | 131 | 貸し椀淵 (1) | 大和 剣 |
| 14 | 132 | 貸し椀淵 (2) | 大和 剣 |
| 15 | 132 | 貸し椀淵 (3) | 大和 剣 |
| 16 | 133 | 貸し椀淵 (4) | 大和 剣 |
| 17 | 134 | 食わず女房 | 大和 洞口 |
| 18 | 135 | 鼠の糞土 | 大和 剣 |
| 19 | 137 | すりこぎ隠し | 大和 上栗巢 |
| 20 | 138 | 猫化け退治 | 大和 洞口 |
| 21 | 143 | おもらに嫁入りしなかった娘の草花 | 大和 牧 |
| 22 | 144 | 蛇婿入り (1) | 大和 上栗巢 |
| 23 | 147 | 猿婿入り | 大和 徳永 |
| 24 | 148 | 嫁と姑 | 大和 福田 |
| 25 | 149 | 肉付き面 | 大和 牧 |
| 26 | 151 | 内ヶ谷の知恵者 | 大和 洞口 |
| 27 | 152 | 仇討ちの歌 | 大和 洞口 |
| 28 | 154 | 子守唄内通 | 大和 洞口 |
| 29 | 156 | 蟻通し | 大和 洞口 |
| 30 | 158 | 化けもの退治 | 大和 洞口 |
| 31 | 162 | おばりょうかおほうか | 大和 上栗巢 |
| 32 | 168 | 出そうか出そまいか | 大和 上栗巢 |
| 33 | 173 | まま子と歌 | 大和 洞口 |
| 34 | 174 | まま子と破魔弓 | 大和 洞口 |
| 35 | 177 | まま子とふたば草 | 大和 下栗巢 |
| 36 | 178 | まま子の栗拾い | 大和 小間見 |
| 37 | 179 | 薬すべ長者 | 大和 洞口 |
| 38 | 181 | 一寸法師 | 大和 落部 |
| 39 | 183 | 婿入り話 | 大和 上栗巢 |
| 40 | 187 | 大年の火 (1) | 大和 牧 |
| 41 | 189 | 弘法とくもの化け | 大和 万場 |
| 42 | 190 | 弘法と石いも | 大和 小間見 |
| 43 | 191 | 鳥飲み爺 (1) | 大和 下古道 |
| 44 | 193 | 鷹の捨て子 | 大和 小間見 |
| 45 | 196 | 和尚と小僧 | 大和 口神路 |
| 46 | 199 | 甘酒は仏さま | 大和 洞口 |
| 47 | 201 | ふくふく、ひたるひたる | 大和 大間見 |
| 48 | 202 | 焼餅和尚 | 大和 上栗巢 |
| 49 | 203 | 猫と南瓜 | 大和 下古道 |
| 50 | 204 | 蛇に手斧 | 大和 洞口 |
| 51 | 205 | 狐退治の失敗 | 大和 剣 |
| 52 | 209 | そばの根はなぜ赤い | 大和 名皿部 |
| 53 | 211 | 鏡屋と琴三味線 | 大和 洞口 |
| 54 | 213 | グズ | 大和 剣 |
| 55 | 215 | 鯖売りのさきつつあんの出世 | 大和 牧 |
| 56 | 219 | 屁こきの婿入り | 大和 上栗巢 |
| 57 | 221 | 嘘つき三太 | 大和 山田 |
| 58 | 224 | なまかわ者の天昇り | 大和 上栗巢 |
| 59 | 229 | みょうが宿 | 大和 山田 |
| 60 | 230 | おれがこいた屁 | 大和 福田 |
| 61 | 231 | ひとつきに一回 | 大和 洞口 |
| 62 | 232 | ひよっとこしょ | 大和 上栗巢 |
| 63 | 233 | 本殺し生殺し | 大和 徳永 |
| 64 | 235 | 柴を刈らずにくさかった | 大和 洞口 |
| 65 | 236 | 短い話 | 大和 福田 |
| 66 | 236 | 天から細引 | 大和 古道 |

『美濃の民話』 第一集 赤座憲久編 (未来社) 1973

| 番号 | 掲載開始頁 | 題 名 | 伝 承 地 |
|----|-------|----------|--------|
| 1 | 177 | 高賀山の鬼 | 八幡 那比 |
| 2 | 180 | 宝刀祖師野丸 | 和良 祖師野 |
| 3 | 184 | おまん桜 | 白鳥 北濃 |
| 4 | 188 | 雨乞いの藁の竜 | 八幡 五町 |
| 5 | 192 | 中西のキツネ | 白鳥 中西 |
| 6 | 195 | 那留が野のキツネ | 白鳥 那留 |
| 7 | 197 | 根村のタヌキ | 美並 根村 |
| 8 | 201 | 浄安杉 | 白鳥 石徹白 |

『美濃の民話』 第二集 赤座憲久編 (未来社) 1977

| 番号 | 掲載開始頁 | 題 名 | 伝 承 地 |
|----|-------|------------|--------|
| 1 | 139 | 那留が野のキツネ | 白鳥 那留 |
| 2 | 141 | 今日様と山んば | 大和 |
| 3 | 143 | 内が谷の子ども | 大和 内ヶ谷 |
| 4 | 145 | 石の地藏様 | |
| 5 | 147 | 海へ落ちたなまけもの | |
| 6 | 150 | めしくわん嫁 | |
| 7 | 153 | 天狗のこぶとり | |
| 8 | 156 | 水恋鳥 (二) | 白鳥 石徹白 |
| 9 | 159 | ウスボドチ | |
| 10 | 162 | 女池の大蛇 | 白鳥 那留 |
| 11 | 165 | 笛吹きと竜 | 白鳥 石徹白 |
| 12 | 168 | 茶釜岩 | 八幡 初納 |
| 13 | 170 | 八百比久尼 | |
| 14 | 176 | べっぴんの屁 | 白鳥 |
| 15 | 178 | 人柱のおよし | 八幡 |

『和良の民俗』 昭和53年度調査報告 猪岡洋編 (東洋大学民俗研究会) 1979

| 番号 | 掲載開始頁 | 題 名 | 伝 承 地 |
|----|-------|---------|--------|
| 1 | 229 | 雀孝行 | 和良 下洞 |
| 2 | 229 | 雀孝行 | 和良 上沢 |
| 3 | 230 | 水乞鳥 | 和良 下洞 |
| 4 | 230 | 尻尾の釣 | 和良 下洞 |
| 5 | 230 | 十二支の由来 | 和良 下洞 |
| 6 | 230 | 猿と蛙の餅争い | 和良 下洞 |
| 7 | 231 | 古屋の漏り | 和良 下洞 |
| 8 | 231 | 鶯の捨て子 | 和良 下洞 |
| 9 | 231 | 蛇婿入り | 和良 下土京 |
| 10 | 232 | 蛇女房 | 和良 宮地 |
| 11 | 232 | 桃太郎 | 和良 法師丸 |
| 12 | 232 | 桃太郎 | 和良 法師丸 |
| 13 | 233 | 米埋糠埋 | 和良 下洞 |
| 14 | 233 | 継子の栗拾い | 和良 横野 |
| 15 | 233 | 竹伐り爺 | 和良 野尻 |
| 16 | 234 | 舌切雀 | 和良 宮地 |
| 17 | 235 | 門松の由来 | 和良 鹿倉 |
| 18 | 235 | 笠地藏 | 和良 法師丸 |
| 19 | 235 | 和尚お代わり | 和良 法師丸 |
| 20 | 235 | 焼餅 | 和良 法師丸 |
| 21 | 236 | 焼餅 | 和良 横野 |
| 22 | 236 | 馬の落し物 | 和良 下洞 |
| 23 | 236 | 草刈ろう | 和良 法師丸 |
| 24 | 236 | 草刈ろう | 和良 法師丸 |
| 25 | 237 | もとの平六 | 和良 下洞 |
| 26 | 237 | 無精くらべ | 和良 下洞 |
| 27 | 237 | こんな顔 | 和良 東野 |
| 28 | 237 | 団子髻 | 和良 法師丸 |
| 29 | 238 | 茗荷宿 | 和良 法師丸 |

『和良の民俗』 昭和53年度調査報告 猪岡洋編 (東洋大学民俗研究会) 1979

| 番号 | 掲載開始頁 | 題名 | 伝承地 |
|----|-------|----------------|--------|
| 30 | 238 | 肉付面 | 和良 下洞 |
| 31 | 240 | 長い話 | 和良 下洞 |
| 32 | 240 | 長い話 | 和良 鹿倉 |
| 33 | 240 | ヒョウタンから米が出てきた話 | 和良 鹿倉 |
| 34 | 240 | 継子の話 | 和良 法師丸 |
| 35 | 240 | 婆の鳥料理 | 和良 下洞 |
| 36 | 241 | 牛にひかれて善光寺語り | 和良 下洞 |
| 37 | 241 | ヨシスケヨシミツ | 和良 下洞 |
| 38 | 241 | 継子いじめの話 | 和良 宮地 |
| 39 | 242 | 義経伝説 | 和良 下土京 |
| 40 | 243 | 鬼の首 | 和良 下沢 |
| 41 | 243 | 瓢岳の鬼 | 和良 下沢 |
| 42 | 244 | がらん婆 | 和良 下沢 |
| 43 | 245 | 重ね岩 | 和良 宮地 |
| 44 | 246 | 蜘蛛淵 | 和良 鹿倉 |
| 45 | 247 | 鬼の首 | 和良 宮代 |
| 46 | 248 | 義経伝説 | 和良 宮代 |
| 47 | 248 | 山婆の足跡と小便池 | 和良 宮代 |
| 48 | 248 | 浄流寺 | 和良 宮代 |
| 49 | 248 | 河童の証文 | 和良 宮代 |
| 50 | 248 | 宗祇柿 | 和良 宮代 |
| 51 | 248 | 刀掛けの松 | 和良 宮代 |
| 52 | 249 | 蛇穴 | 和良 野尻 |
| 53 | 249 | コンニャク芋栽培しない理由 | 和良 野尻 |

『ふるさとのむかしばなし』 那比公民館 (那比公民館) 1992

| 番号 | 掲載開始頁 | 題名 | 伝承地 |
|----|-------|-----------------------|-------|
| 1 | 2 | やまんぼとらずの機 | 八幡 那比 |
| 2 | 3 | 天狗と暮らした朝吉と石仏 | 八幡 那比 |
| 3 | 5 | 新宮の朝日伝説と銭岩のはなし | 八幡 那比 |
| 4 | 7 | 天暦の悲しきロマン | 八幡 那比 |
| 5 | 9 | 投げ込まれた大日如来仏ヶ淵の由来 | 八幡 那比 |
| 6 | 10 | うるら六佐のまねできぬ | 八幡 那比 |
| 7 | 11 | 黄金小束で捨二束 | 八幡 那比 |
| 8 | 14 | 竹のたすきと牛方 | 八幡 那比 |
| 9 | 15 | 猪喰い箸 | 八幡 那比 |
| 10 | 15 | 若狭氏の伝え | 八幡 那比 |
| 11 | 16 | 明智岩のはなし | 八幡 那比 |
| 12 | 17 | 高賀山頂の経塚物語 | 八幡 那比 |
| 13 | 18 | 野を駆けて麦を喰う絵馬 | 八幡 那比 |
| 14 | 20 | 青葉の笛 | 八幡 那比 |
| 15 | 21 | 一の鳥居と二の鳥居 雨乞い瀬戸の宵闇まつり | 八幡 那比 |
| 16 | 22 | 猪穴と猪肉桶 伊勢湾のブリと嫁入岩 | 八幡 那比 |
| 17 | 25 | 猿丸太夫伝説に関わる話 | 八幡 那比 |
| 18 | 33 | 奇怪な大杉 | 八幡 那比 |
| 19 | 34 | きつねの嫁入り | 八幡 那比 |
| 20 | 35 | 美坂の鬼退治 | 八幡 那比 |
| 21 | 36 | 那比谷の湯屋 | 八幡 那比 |
| 22 | 39 | ろくさぶさの怪力 | 八幡 那比 |

『小駄良の民話』 井上正道・森政治編・再話 (川合小学校) 1973

| 番号 | 掲載開始頁 | 題名 | 伝承地 |
|----|-------|---------|--------|
| 1 | 10 | 露洞姫 | 八幡 小駄良 |
| 2 | 16 | ジエモサの清水 | 八幡 小駄良 |
| 3 | 21 | 初音の狐 1 | 八幡 小駄良 |
| 4 | 26 | 初音の狐 2 | 八幡 小駄良 |
| 5 | 31 | 西現湯と薬師様 | 八幡 小駄良 |
| 6 | 35 | 稚児権現様 | 八幡 小駄良 |

『小駄良の民話』 井上正道・森政治編・再話 (川合小学校) 1973

| 番号 | 掲載開始頁 | 題名 | 伝承地 |
|----|-------|-------------|--------|
| 7 | 39 | ヘンピ石 | 八幡 小駄良 |
| 8 | 44 | 五郎左新田 | 八幡 小駄良 |
| 9 | 48 | 八百比久尼物語 | 八幡 小駄良 |
| 10 | 58 | 天神様の光る石 | 八幡 小駄良 |
| 11 | 63 | じじが淵 | 八幡 小駄良 |
| 12 | 68 | ふるさとのうた | 八幡 小駄良 |
| 13 | 75 | 鬼子母神 | 八幡 小駄良 |
| 14 | 79 | カッパの川太郎 | 八幡 小駄良 |
| 15 | 83 | 教円和尚と銀狐の話 1 | 八幡 小駄良 |
| 16 | 86 | 教円狐 その2 | 八幡 小駄良 |
| 17 | 87 | 教円狐 その3 | 八幡 小駄良 |
| 18 | 90 | 小駄良才平 | 八幡 小駄良 |
| 19 | 92 | 崇る木 | 八幡 小駄良 |
| 20 | 96 | 戒仏薬師 | 八幡 小駄良 |
| 21 | 99 | 影のさす木と藤巻清水 | 八幡 小駄良 |
| 22 | 103 | 南宮神社 盗まれた本尊 | 八幡 小駄良 |
| 23 | 104 | 甚五郎のこま犬 | 八幡 小駄良 |
| 24 | 107 | 小駄良心中 | 八幡 小駄良 |
| 25 | 113 | 最後谷 | 八幡 小駄良 |
| 26 | 116 | 戒仏奥の宮 | 八幡 小駄良 |
| 27 | 120 | 十二体の仏像 | 八幡 小駄良 |
| 28 | 127 | 戸立ての神様 | 八幡 小駄良 |
| 29 | 130 | 天狗様と与之吉の話 | 八幡 小駄良 |
| 30 | 133 | 河鹿学校の幽霊 | 八幡 小駄良 |
| 31 | 137 | 十郎兵衛と五郎兵衛観音 | 八幡 小駄良 |
| 32 | 141 | 印雀の弥宜殿 | 八幡 小駄良 |
| 33 | 144 | 姫の神-河鹿の賀喜踊 | 八幡 小駄良 |
| 34 | 150 | 横井の青大将 | 八幡 小駄良 |
| 35 | 154 | 乙姫淵とヤカン淵 | 八幡 小駄良 |

『郡上の昔話・昔の話』 和田昌三 編 (一つ葉文庫) 1991

| 番号 | 掲載開始頁 | 題名 | 伝承地 |
|----|-------|----------------------|--------|
| 1 | 9 | 小那比のキツネ (ばかされた吉右衛門) | 八幡 小那比 |
| 2 | 11 | 五町の雨乞い (竜の怒りで大洪水) | 八幡 五町 |
| 3 | 13 | 市島のカッパ (力比べで川の中へ) | 八幡 市島 |
| 4 | 15 | 梅屋の旦那 (主人の心づかい) | 八幡 |
| 5 | 16 | 漆さし (キツネが恩返し) | 八幡 初能 |
| 6 | 18 | 山んばの仕返し (赤子を殺した糸玉) | 大和 河辺 |
| 7 | 20 | 城山の夢ギツネ (昼寝したまされる) | 八幡 |
| 8 | 22 | 聖淵 (山伏のたたり) | 八幡 小那比 |
| 9 | 24 | ホギヤホギヤ淵 (カッパに食われた) | 高鷲 鮎走 |
| 10 | 25 | 赤谷川の由来 (きられた武士の血が) | 八幡 愛宕 |
| 11 | 25 | 赤谷川の由来 (きられた武士の血が) | 八幡 愛宕 |
| 12 | 26 | 赤谷川の由来 (きられた武士の血が) | 八幡 愛宕 |
| 13 | 27 | 老僧路 (嫁いだ娘に会いたい) | 八幡 旭 |
| 14 | 29 | 大洞川のカッパ (三蔵が見事に退治) | 八幡 市島 |
| 15 | 30 | キツネ火 (だまされた馬車曳き) | 八幡 初音 |
| 16 | 32 | 小山のオオカミ (送り迎いの礼に油揚げ) | 八幡 旭 |
| 17 | 33 | 京塚山 (比叡山の僧が焼き打ち) | 八幡 市島 |
| 18 | 35 | 山バトの話 | 白鳥 |
| 19 | 35 | 山バトの話 | 高鷲 |
| 20 | 36 | 名皿部峠のキツネ (白い歯の美しい女) | 大和 名皿部 |
| 21 | 37 | 弥助と竹蔵 (暗い夜道で冷や汗) | 明宝 |
| 22 | 39 | 初音の山犬 (一晩中戸にあたる) | 八幡 初音 |
| 23 | 40 | 布淵 (イワナが虚無僧に) | 明宝 寒水 |
| 24 | 43 | 戸立て (キツネが通せんぼ) | 八幡 初音 |
| 25 | 45 | 那留の峠の白ギツネ (花嫁にばげだます) | 白鳥 那留 |
| 26 | 47 | 天狗と飛脚 (通り道に手や足が) | 八幡 五町 |

『郡上の昔話・昔の話』 和田昌三 編（一つ葉文庫）1991

| 番号 | 掲載開始頁 | 題 名 (副題) | 伝 承 地 |
|----|-------|----------------------|--------|
| 27 | 49 | 三部経 (石ころを大事そうに) | 明宝 二間手 |
| 28 | 50 | 牛に化けた地藏様 (山へ行く人通せんぼ) | 高鷲 鮎走 |
| 29 | 52 | ざっと淵 (盲人が山の下敷き) | 白鳥 |
| 30 | 53 | 嘉平淵 (死んだ男が仕返し) | 明宝 寒水 |
| 31 | 56 | エボシ岩 (ヒイラギが鬼退治) | 八幡 那比 |
| 32 | 57 | 西現さま (急病治した泉あと) | 八幡 初音 |
| 33 | 59 | 貝が洞の由来 (嵐のときに大きな貝が) | 八幡 五町 |
| 34 | 60 | 延命地藏さま (身投げを救おうと) | 八幡 尾崎 |
| 35 | 61 | 善光寺如来 (土の中から仏像が) | |

『郡上の伝説』 加藤一男著 (加藤一男発行) 2004

| 番号 | 掲載開始頁 | 題 名 | 伝 承 地 |
|----|-------|-----------|--------|
| 1 | 1 | 大日岳の白馬 | 高鷲 西洞 |
| 2 | 2 | 名刀千束丸 | 高鷲 向鷲見 |
| 3 | 3 | 鷲退治 | 高鷲 向鷲見 |
| 4 | 5 | 六ツ城 | 白鳥 野添 |
| 5 | 7 | 貴船神社 | 白鳥 野添 |
| 6 | 9 | 原口城 | 白鳥 |
| 7 | 10 | 仮宿湖のかわろう | 白鳥 中津屋 |
| 8 | 11 | 那留ヶ野の狐 | 白鳥 那留 |
| 9 | 13 | おまむ桜 | 白鳥 長滝 |
| 10 | 14 | 阿弥陀ヶ瀧 | 白鳥 前谷 |
| 11 | 15 | 村間ヶ池 | 白鳥 前谷 |
| 12 | 16 | 老婆が動かした木像 | 白鳥 石徹白 |
| 13 | 17 | おしどり谷の長者 | 白鳥 石徹白 |
| 14 | 18 | 和田山の龍神 | 白鳥 石徹白 |
| 15 | 19 | 首無墓てん | 白鳥 石徹白 |
| 16 | 22 | 石徹白の力女 | 白鳥 石徹白 |
| 17 | 24 | 蛇切り長助 | 白鳥 石徹白 |
| 18 | 26 | 犬石 | 白鳥 石徹白 |
| 19 | 27 | 浄安杉 | 白鳥 石徹白 |
| 20 | 29 | 根後山と二又の朴葉 | 白鳥 石徹白 |
| 21 | 51 | 小野天満宮 | 八幡 小野 |
| 22 | 52 | 岸剣神社 | 八幡 |
| 23 | 53 | 力石 | 八幡 |
| 24 | 54 | 八幡城の人柱 | 八幡 |
| 25 | 55 | 白米城 | 八幡 |
| 26 | 57 | カッパの恩返し | 八幡 初納 |
| 27 | 59 | 狐の恩返し | 八幡 初納 |
| 28 | 62 | 牛隠れの池 | 八幡 初納 |
| 29 | 63 | 茶釜岩 | 八幡 初納 |
| 30 | 64 | 猿丸太夫の出生地 | 八幡 那比 |
| 31 | 65 | 慶西上人の墓 | 八幡 那比 |
| 32 | 66 | 銭岩 | 八幡 那比 |
| 33 | 67 | 殿上湖 | 八幡 那比 |
| 34 | 68 | 佛ヶ湖 | 八幡 那比 |
| 35 | 69 | 名馬磨墨 | 明宝 気良 |
| 36 | 70 | 婆岩 | 明宝 水沢上 |
| 37 | 71 | 鬼の首 | 和良 下沢 |
| 38 | 72 | 蛇穴 | 和良 野尻 |
| 39 | 74 | 重ね岩 | 和良 宮地 |
| 40 | 75 | 御手洗の瀧 | 和良 法師丸 |
| 41 | 76 | 鏡掛けの松 | 和良 |
| 42 | 77 | 瓢ヶ岳の鬼退治 | 美並 |
| 43 | 79 | 身代わり円空仏 | 美並 上田 |

『古今伝授の里 やまとの伝説』 加藤一男著 (加藤一男発行) 2002

| 番号 | 掲載開始頁 | 題 名 | 伝 承 地 |
|----|-------|------------|--------|
| 1 | 1 | 釜淵の大亀 | 大和 徳永 |
| 2 | 3 | 弁慶岩 | 大和 徳永 |
| 3 | 4 | オツネ岩 | 大和 徳永 |
| 4 | 5 | 猿ヶ清水 | 大和 徳永 |
| 5 | 7 | 不思議谷 | 大和 河辺 |
| 6 | 8 | 弁慶石 | 大和 河辺 |
| 7 | 9 | ごりん湖の河童 | 大和 神路 |
| 8 | 11 | 八幡城の人柱 | 大和 神路 |
| 9 | 13 | 東林寺の懸仏 | 大和 牧 |
| 10 | 14 | 洗われた神様 | 大和 牧 |
| 11 | 15 | 千人塚 | 大和 牧 |
| 12 | 16 | 薙刀清水 | 大和 牧 |
| 13 | 17 | 抜け出た絵馬 | 大和 牧 |
| 14 | 18 | 妙見様と桃の種 | 大和 牧 |
| 15 | 19 | 民造岩 | 大和 牧 |
| 16 | 21 | 不思議な掛軸と床の間 | 大和 牧 |
| 17 | 23 | 三日坂 | 大和 牧 |
| 18 | 24 | 牧村の力持 | 大和 牧 |
| 19 | 25 | 飛び去る金の鶏 | 大和 古道 |
| 20 | 26 | 瀬戸湖の大蛇 | 大和 古道 |
| 21 | 27 | 平家館 | 大和 古道 |
| 22 | 28 | 新四郎さ | 大和 古道 |
| 23 | 30 | 冠城 | 大和 栗巣 |
| 24 | 31 | 椀貸し湖 | 大和 栗巣 |
| 25 | 32 | 松葉洞の天狗 | 大和 栗巣 |
| 26 | 33 | 槍石 | 大和 母袋 |
| 27 | 34 | 二つの白山神社 | 大和 母袋 |
| 28 | 35 | 平家の墓 | 大和 母袋 |
| 29 | 36 | 銭かみ岩 | 大和 母袋 |
| 30 | 37 | 阿千葉城 | 大和 剣 |
| 31 | 38 | よえもん湖 | 大和 剣 |
| 32 | 39 | よえもん仏 | 大和 剣 |
| 33 | 40 | 赤歩岐の古狸 | 大和 剣 |
| 34 | 41 | 剣村の力持 | 大和 剣 |
| 35 | 42 | 松尾城 | 大和 大間見 |
| 36 | 43 | 地藏湖 | 大和 大間見 |
| 37 | 44 | 小次郎湖と布湖 | 大和 大間見 |
| 38 | 45 | 旗立て石 | 大和 大間見 |
| 39 | 46 | 大月の鬼退治 | 大和 小間見 |
| 40 | 47 | 七軒七社 | 大和 万場 |
| 41 | 48 | 万場村の力持 | 大和 万場 |
| 42 | 49 | 貴船神社 | 大和 万場 |
| 43 | 51 | 熊野神社の大石 | 大和 万場 |
| 44 | 52 | 公卿さの娘 | 大和 万場 |
| 45 | 53 | 久仙のつちのこ | 大和 名皿部 |
| 46 | 54 | 子守地藏 | 大和 徳永 |
| 47 | 55 | 木越城 | 大和 島 |
| 48 | 56 | 七代天神 | 大和 島 |
| 49 | 57 | 豊龍神社と大蛇 | 大和 島 |
| 50 | 58 | 草の生えない寺跡 | 大和 落部 |
| 51 | 59 | 板壁に浮かぶ少女の像 | 大和 福田 |
| 52 | 60 | 不思議な鏡 | 大和 内ヶ谷 |
| 53 | 61 | 内ヶ谷の知恵者 | 大和 内ヶ谷 |

『美濃と飛騨のむかし話』 岐阜県小中学校長会編(岐阜県小中学校長会) 1968

| 番号 | 掲載開始頁 | 題 名 | 伝 承 地 |
|----|-------|----------|-------|
| 1 | 201 | 高賀山の魔者退治 | 美並 |

『続・美濃と飛騨のむかし話』岐阜県小中学校校長会編（岐阜県小中学校校長会）1970

| 番号 | 掲載開始頁 | 題 名 | 伝 承 地 |
|----|-------|------|--------|
| 1 | 49 | 茶釜岩 | 八幡 |
| 2 | 147 | 雨乞い | 八幡 五町 |
| 3 | 299 | 浄安スギ | 白鳥 石徹白 |

『読みがたり 岐阜のむかし話』岐阜児童文学研究会編 日本標準 2004

| 番号 | 掲載開始頁 | 題 名 | 伝 承 地 |
|----|-------|------------|-------|
| 1 | 125 | まま子と本子 | |
| 2 | 135 | 木ぼりのニワトリ | |
| 3 | 158 | 銀のとりにい | |
| 4 | 184 | カワウソが読んだ手紙 | |
| 5 | 186 | ござうとあま酒 | |
| 6 | 194 | てんぐのかくれみの | |
| 7 | 225 | うそくらべ | |
| 8 | 227 | 長い話とみじかい話 | |

『岐阜の伝説』岐阜児童文学研究会編(日本標準) 1978

| 番号 | 掲載開始頁 | 題 名 | 伝 承 地 |
|----|-------|-------|--------|
| 1 | 31 | 浄安杉 | 白鳥 石徹白 |
| 2 | 74 | 茶釜岩 | 八幡 川佐 |
| 3 | 78 | 平家岩 | 八幡 小那比 |
| 4 | 135 | 那留が野 | 白鳥 那留 |
| 5 | 218 | 高賀山の鬼 | 美並 粥川 |

『わらむらにのこる民謡と昔話』和良村教育委員会編(和良村教育委員会)1996

| 番号 | 掲載開始頁 | 題 名 | 伝 承 地 |
|----|-------|----------------|-------|
| 1 | 19 | 焼餅 | 和良 |
| 2 | 19 | 笠地藏 | 和良 |
| 3 | 20 | 雀孝行 | 和良 |
| 4 | 20 | 水乞鳥 | 和良 |
| 5 | 20 | 尻尾の釣 | 和良 |
| 6 | 21 | 十二支の由来 | 和良 |
| 7 | 22 | 団子髻 | 和良 |
| 8 | 23 | 米埋糠埋 | 和良 |
| 9 | 23 | 継子の栗拾い | 和良 |
| 10 | 24 | 蛇婿入り | 和良 |
| 11 | 25 | 蛇女房 | 和良 |
| 12 | 25 | 鶯の捨て子 | 和良 |
| 13 | 26 | 舌切雀 | 和良 |
| 14 | 28 | ヨシスケ、ヨシミツ | 和良 |
| 15 | 28 | 継子いじめの話 | 和良 |
| 16 | 29 | こんな顔 | 和良 |
| 17 | 29 | もとの平六 | 和良 |
| 18 | 30 | 草刈ろう | 和良 |
| 19 | 30 | 和尚お代わり | 和良 |
| 20 | 31 | 門松の由来 | 和良 |
| 21 | 31 | ヒョウタンから米が出てきた話 | 和良 |
| 22 | 32 | 猿と蛙の餅争い | 和良 |
| 23 | 33 | 古屋の雨漏り | 和良 |
| 24 | 33 | 竹伐爺 | 和良 |
| 25 | 34 | 肉付面 | 和良 下洞 |
| 26 | 36 | 牛にひかれて善光寺詣り | 和良 |
| 27 | 36 | 茗荷宿 | 和良 |
| 28 | 37 | 無精くらべ | 和良 |
| 29 | 37 | 婆の鳥料理 | 和良 |
| 30 | 38 | 馬の落とし物 | 和良 |

『ふるさと八幡』 八幡町教育委員会編(八幡町教育委員会) 1974

| 番号 | 掲載開始頁 | 題名 | 伝承地 |
|----|-------|-----------------|-----|
| 1 | 12 | 城下町八幡(およし物語) | 八幡 |
| 2 | 14 | 城下町八幡(力石) | 八幡 |
| 3 | 27 | 那比の新宮(高光のおにたいじ) | 美並 |
| 4 | 56 | 名刀蛇切丸 | 八幡 |

『わたしたちの岐阜県の伝説』 後藤時男(大衆書房) 1972

| 番号 | 掲載開始頁 | 題名 | 伝承地 |
|----|-------|-------------|--------|
| 1 | 65 | 雨ごいをしなくなった村 | 八幡 五町 |
| 2 | 67 | 人柱になった「およし」 | 八幡 |
| 3 | 68 | 大スギとクマしみず | 白鳥 石徹白 |
| 4 | 70 | おまむ桜 | 白鳥 北濃 |
| 5 | 72 | 鉄のきらいな大蛇 | 白鳥 前谷 |
| 6 | 74 | うばすて山 | 白鳥 牛道 |
| 7 | 75 | 笛の名人と竜神 | 白鳥 石徹白 |
| 8 | 77 | 大日岳と白馬 | 高鷲 折立 |
| 9 | 79 | ふしぎなうなぎ | 美並 粥川 |
| 10 | 81 | イボ石 | 和良 横野 |
| 11 | 84 | ふしぎな穴と竜 | 和良 野尻 |

『柳田国男未採択昔話聚稿』 野村純一編(瑞木書房) 2002

| 番号 | 掲載開始頁 | 題名 | 伝承地 |
|----|-------|-----------|--------|
| 1 | 79 | 福助の話 | 大和 内ヶ谷 |
| 2 | 80 | 牡丹の好きな娘の話 | 大和 内ヶ谷 |
| 3 | 82 | 犬になった妻の話 | 大和 内ヶ谷 |
| 4 | 82 | 夢が真であった話 | 大和 内ヶ谷 |
| 5 | 83 | 四郎とシロの話 | 大和 内ヶ谷 |
| 6 | 85 | たこと猫の話 | 大和 内ヶ谷 |
| 7 | 85 | 鬼が仏に変わった話 | 大和 内ヶ谷 |
| 8 | 86 | 馬鹿婿の話 | 大和 内ヶ谷 |
| 9 | 86 | 馬になった娘の話 | 大和 内ヶ谷 |
| 10 | 87 | 煙草の始り | 大和 内ヶ谷 |
| 11 | 88 | 継子いじめ | 大和 内ヶ谷 |
| 12 | 89 | 猿と熊 | 白鳥 石徹白 |

『岐阜県の民話』 日本児童文学者協会編(偕成社) 1981

| 番号 | 掲載開始頁 | 題名 | 伝承地 |
|----|-------|----------|--------|
| 1 | 67 | 無間のかね | 大和 母袋 |
| 2 | 158 | 藤吉の墓 | 八幡 那比 |
| 3 | 173 | びたびたじょうり | 大和 大間見 |

『子どもの版画・絵本 ぎふのむかしばなし』 下呂小学校(あい書房) 1978

| 番号 | 掲載開始頁 | 題名 | 伝承地 |
|----|-------|---------|-------|
| 1 | | なるが野キツネ | 白鳥 那留 |

『日本の伝説 8 東海』 日本伝説拾遺会編(山田書院) 1972

| 番号 | 掲載開始頁 | 題名 | 伝承地 |
|----|-------|--------|-------|
| 1 | 134 | 星宮と粥川鱈 | 美並 粥川 |

『美並村史』 通史編下巻 美並村教育委員会編(美並村教育委員会) 1984

| 番号 | 掲載開始頁 | 題名 | 伝承地 |
|----|-------|---------|-------|
| 1 | 707 | 大師伝説 | 美並 |
| 2 | 709 | 蚕神の起こり | 美並 |
| 3 | 709 | 堂社・石塔伝説 | 美並 |
| 4 | 710 | 塚・墓の伝説 | 美並 |
| 5 | 712 | 円空の願力 | 美並 木尾 |
| 6 | 712 | 越中比丘尼 | 美並 深戸 |
| 7 | 712 | 西神頭と神迎え | 美並 菊安 |

『美並村史』通史編下巻 美並村教育委員会編（美並村教育委員会） 1984

| 番号 | 掲載開始頁 | 題 名 | 伝 承 地 |
|----|-------|------------|----------|
| 8 | 713 | 高光伝承 | 美並 |
| 9 | 713 | 落人伝説 | 美並 |
| 10 | 713 | 源助さん | 美並 勝原 |
| 11 | 715 | 木・石・測・洞伝説 | 美並 |
| 12 | 716 | 井戸伝説 | 美並 |
| 13 | 716 | 雨乞い伝説 | 美並 |
| 14 | 717 | 膳椀貸し伝説 | 美並 |
| 15 | 718 | 年中行事伝説 | 美並 |
| 16 | 720 | 焚物の神と食物の神 | 美並 福野 |
| 17 | 720 | 笠地藏 | 美並 下田 |
| 18 | 722 | 継子の栗拾い | 美並 荻安 |
| 19 | 722 | 天から細引き | 美並 荻安 |
| 20 | 723 | 千年桃 | 美並 荻安 |
| 21 | 723 | 殿様の赤烏帽子 | 美並 |
| 22 | 725 | 天狗 | 美並 |
| 23 | 726 | 山の神 | 美並 |
| 24 | 726 | 河童（どちどろべい） | 美並 |
| 25 | 728 | 大亀 | 美並 深戸 |
| 26 | 728 | 水蜘蛛 | 美並 荻安 |
| 27 | 728 | せくらべ | 美並 |
| 28 | 729 | つし婆 | 美並 |
| 29 | 729 | 狐のいたずら | 美並 |
| 30 | 732 | 狸に化かされた話 | 美並 |
| 31 | 733 | 神は牛が嫌い | 美並 赤池・杉原 |

『郡上八幡町史』下巻 太田成和編（臨川書院） 1987

| 番号 | 掲載開始頁 | 題 名 | 伝 承 地 |
|----|-------|------------|--------|
| 1 | 896 | 六本杉 | 八幡 勝皿 |
| 2 | 897 | 影のさす木 | 八幡 有坂 |
| 3 | 898 | 逆杉 | 八幡 勝皿 |
| 4 | 899 | ヨロイカケの松 | 八幡 |
| 5 | 899 | カヤの木 | 八幡 坪佐 |
| 6 | 899 | 崇る木 | |
| 7 | 900 | 目印しの木 | |
| 8 | 900 | 御影石 | 八幡 小野 |
| 9 | 900 | ひとり石 | 八幡 鬼谷 |
| 10 | 901 | 武器になった石 | |
| 11 | 901 | 石仏 | 八幡 入間 |
| 12 | 901 | 崇る石 | 八幡 穀見 |
| 13 | 901 | 重岩 | 和良 戸隠 |
| 14 | 901 | トンビ岩 | 八幡 西乙原 |
| 15 | 902 | ゼニ岩 | 八幡 那比 |
| 16 | 902 | かかり岩 | 八幡 |
| 17 | 902 | 弁慶岩 | 八幡 勝皿 |
| 18 | 902 | 平家岩 | |
| 19 | 902 | 灯明岩 | 八幡 亀尾島 |
| 20 | 902 | 乳岩 | 八幡 坪佐 |
| 21 | 903 | エボシ岩 | 八幡 那比 |
| 22 | 903 | 明智岩 | 八幡 那比 |
| 23 | 903 | 茶釜岩 | 八幡 初納 |
| 24 | 904 | 男岩女岩 | 八幡 枅形 |
| 25 | 904 | 仏岩 | 八幡 亀尾島 |
| 26 | 904 | 御坂ヶ岳 | 八幡 那比 |
| 27 | 905 | 弘法清水 | 八幡 乙姫 |
| 28 | 905 | 白雲水 | 八幡 本町 |
| 29 | 905 | 笠神様の清水 | 八幡 坪佐 |
| 30 | 906 | 日照りにもかれない水 | 八幡 初音 |
| 31 | 906 | セト | 八幡 亀尾島 |

『郡上八幡町史』下巻 太田成和編（臨川書院） 1987

| 番号 | 掲載開始頁 | 題名 | 伝承地 |
|----|-------|---------------|--------|
| 32 | 907 | 猪々ヶ瀬 | 八幡 |
| 33 | 907 | ビワ淵 | 八幡 須良々 |
| 34 | 907 | 孫兵衛淵 | 八幡 初納 |
| 35 | 907 | シラサワ淵 | 八幡 是本 |
| 36 | 907 | 矢淵 | 八幡 小那比 |
| 37 | 908 | 仏ヶ淵 | 八幡 那比 |
| 38 | 908 | 殿上淵 | 八幡 新宮 |
| 39 | 908 | 牛隠れ池 | 八幡 初納 |
| 40 | 908 | 天竜峡 | 八幡 初納 |
| 41 | 908 | 大矢淵 | 八幡 五町 |
| 42 | 910 | 道満瀬 | 八幡 五町 |
| 43 | 910 | 御手洗い | 八幡 |
| 44 | 910 | うるしさし | |
| 45 | 910 | 法伝ノ滝 | 八幡 吉野 |
| 46 | 910 | 不動滝 | 八幡 赤谷 |
| 47 | 911 | 三段ノ滝 | 八幡 安久田 |
| 48 | 911 | 天ヶ滝 | 八幡 |
| 49 | 911 | 水上ヶ池 | 明宝 水上 |
| 50 | 913 | 稚児山 | 八幡 田尻 |
| 51 | 914 | 地獄谷 | 八幡 |
| 52 | 914 | 車返し | 八幡 吉野 |
| 53 | 914 | 白米城 | |
| 54 | 915 | 金の鶏 | 八幡 美山 |
| 55 | 915 | 朝日夕日 | 八幡 小那比 |
| 56 | 916 | 八百比久尼 | 八幡 那比 |
| 57 | 917 | ゼン・ワン貸し | |
| 58 | 918 | 木地屋 | |
| 59 | 921 | 落人のはなし | |
| 60 | 922 | 雨乞いのはなし | |
| 61 | 923 | 猿丸太夫 | 八幡 那比 |
| 62 | 924 | 百合若大臣 | 八幡 有坂 |
| 63 | 925 | 姥捨山 | |
| 64 | 926 | 人柱およし | 八幡 |
| 65 | 927 | 牛・馬について | 八幡 小駄良 |
| 66 | 928 | 狼 | |
| 67 | 928 | 狐 | |
| 68 | 929 | かっぱ | |
| 69 | 931 | 露洞姫 | 八幡 坪谷 |
| 70 | 932 | 鷺退治 | |
| 71 | 933 | 白鳩 | |
| 72 | 933 | ふくべ岳の鬼退治 | |
| 73 | 936 | 神の使いの動物 | |
| 74 | 937 | 大師講 | |
| 75 | 937 | 矢について | |
| 76 | 938 | 最後谷 | 八幡 河鹿 |
| 77 | 938 | 天狗だおし | |
| 78 | 939 | 槌の出る話 | 八幡 深皿 |
| 79 | 939 | 十二体の仏像 | 八幡 坪谷 |
| 80 | 940 | 前兆 | 八幡 |
| 81 | 941 | ヤナおあきない（近江商人） | 八幡 那比 |
| 82 | 941 | 塚のはなし | |
| 83 | 941 | 蛇塚 | 八幡 吉田 |
| 84 | 942 | ミコシ塚 | 八幡 吉田 |
| 85 | 942 | 経塚 | 八幡 吉田 |
| 86 | 942 | 八人塚 | 八幡 吉田 |
| 87 | 943 | 七人塚 | 八幡 新宮 |
| 88 | 943 | 千人塚 | |

『大和町史』 通史編下巻 大和町 (大和町) 1988

| 番号 | 掲載開始頁 | 題 名 | 伝 承 地 |
|----|-------|----------|--------|
| 1 | 980 | おつね岩 | 大和 徳永 |
| 2 | 980 | 銭嚙岩 | 大和 母袋 |
| 3 | 981 | のろいの火壺 | 大和 上栗巢 |
| 4 | 981 | 弁慶の足跡 | 大和 徳永 |
| 5 | 981 | 槍岩 | 大和 上栗巢 |
| 6 | 982 | 榎の木 | 大和 剣 |
| 7 | 982 | 宗祇ざくら | 大和 古道 |
| 8 | 982 | 田打ちざくら | 大和 牧 |
| 9 | 983 | 猿が清水 | 大和 徳永 |
| 10 | 984 | 宗祇清水 | 大和 大間見 |
| 11 | 984 | 薙刀清水 | 大和 牧 |
| 12 | 984 | 氏神様 | 大和 神路 |
| 13 | 985 | 川上へ流れた神様 | 大和 内ヶ谷 |
| 14 | 985 | 西宝寺の阿弥陀様 | 大和 母袋 |
| 15 | 986 | 葉成り銀杏 | 大和 大間見 |
| 16 | 986 | 火の守り神 | 大和 万場 |
| 17 | 987 | 不思議な鏡 | 大和 内ヶ谷 |
| 18 | 987 | ふじくにの守り神 | 大和 万場 |
| 19 | 988 | 二つの白山神社 | 大和 上栗巢 |
| 20 | 988 | 妙見様と桃の種 | 大和 牧 |
| 21 | 988 | 無間の鐘 | 大和 上栗巢 |
| 22 | 990 | 森の神様 | 大和 小間見 |
| 23 | 990 | 薬師の黄金仏 | 大和 徳永 |
| 24 | 990 | いもじがほき | 大和 大間見 |
| 25 | 990 | 大月 | 大和 小間見 |
| 26 | 990 | お屋敷洞 | 大和 大間見 |
| 27 | 991 | がまがさこ | 大和 小間見 |
| 28 | 991 | 清水棚 | 大和 万場 |
| 29 | 991 | 盗人畑 | 大和 上栗巢 |
| 30 | 991 | ふしぎ谷 | 大和 河辺 |
| 31 | 992 | ふるやの畑 | 大和 大間見 |
| 32 | 992 | 平家の落人と母袋 | 大和 上栗巢 |
| 33 | 993 | ほろや | 大和 上栗巢 |
| 34 | 993 | 味噌洞 | 大和 小間見 |
| 35 | 993 | 矢が洞 | 大和 剣 |
| 36 | 994 | 足代の化け猫 | 大和 古道 |
| 37 | 994 | かわうそ | 大和 剣 |
| 38 | 995 | 狸 1 | 大和 上栗巢 |
| 39 | 996 | 狸 2 | 大和 上栗巢 |
| 40 | 996 | 狸 3 | 大和 徳永 |
| 41 | 997 | 狸 4 | 大和 神路 |
| 42 | 997 | 狸 5 | 大和 下栗巢 |
| 43 | 997 | 狸 6 | 大和 上栗巢 |
| 44 | 998 | 狸 7 | 大和 剣 |
| 45 | 998 | 栃本の目薬 | 大和 上栗巢 |
| 46 | 998 | 泣かせ猫 | 大和 上栗巢 |
| 47 | 999 | 那留が野狐 | 大和 上栗巢 |
| 48 | 1000 | 薬師の狐 | 大和 徳永 |
| 49 | 1000 | 山犬 | 大和 上栗巢 |
| 50 | 1001 | 山犬と塩 | 大和 上栗巢 |
| 51 | 1001 | 赤髭作兵衛 | 大和 剣 |
| 52 | 1001 | 内ヶ谷の知患者 | 大和 内ヶ谷 |
| 53 | 1002 | 小野江梅軒 | 大和 大間見 |
| 54 | 1002 | 鷺見才三郎 | 大和 大間見 |
| 55 | 1003 | 力自慢の三人 | 大和 |
| 56 | 1005 | 人柱およし | 大和 神路 |
| 57 | 1006 | 母袋与三左 | 大和 上栗巢 |
| 58 | 1008 | 馬淵 | 大和 小間見 |

『大和町史』 通史編下巻 大和町 (大和町) 1988

| 番号 | 掲載開始頁 | 題名 | 伝承地 |
|----|-------|------------|--------|
| 59 | 1008 | 馬乗り淵 | 大和 内ヶ谷 |
| 60 | 1008 | 釜淵 | 大和 徳永 |
| 61 | 1008 | くろ淵 | 大和 上栗巣 |
| 62 | 1009 | 小次郎淵 | 大和 小間見 |
| 63 | 1009 | 巡礼が滝 | 大和 上栗巣 |
| 64 | 1009 | 布淵 | 大和 小間見 |
| 65 | 1009 | 与衛門淵 | 大和 剣 |
| 66 | 1011 | お金屋敷 | 大和 上栗巣 |
| 67 | 1012 | 治太郎御殿 | 大和 上栗巣 |
| 68 | 1013 | 下島屋敷 | 大和 万場 |
| 69 | 1013 | 新四郎屋敷 | 大和 古道 |
| 70 | 1015 | 足谷 | 大和 小間見 |
| 71 | 1015 | 河童 | 大和 神路 |
| 72 | 1017 | 小田坂の化け椿 | 大和 小間見 |
| 73 | 1017 | 黒い玉 | 大和 剣 |
| 74 | 1017 | 大蛇 | 大和 大間見 |
| 75 | 1017 | 天狗 1 | 大和 大間見 |
| 76 | 1018 | 天狗 2 | 大和 内ヶ谷 |
| 77 | 1018 | 天狗 3 | 大和 徳永 |
| 78 | 1018 | 天狗 4 | 大和 内ヶ谷 |
| 79 | 1018 | 天狗 5 | 大和 内ヶ谷 |
| 80 | 1018 | 戸だて | 大和 剣 |
| 81 | 1018 | 幽霊 | 大和 剣 |
| 82 | 1018 | 雪入道 | 大和 小間見 |
| 83 | 1019 | 横障子 | 大和 神路 |
| 84 | 1019 | 恩善寺の門番 | 大和 徳永 |
| 85 | 1019 | 鈴の歌 | 大和 徳永 |
| 86 | 1020 | 大もっけい小もっけい | 大和 上栗巣 |
| 87 | 1022 | 公卿さの娘 | 大和 万場 |
| 88 | 1022 | ちんちんからから | 大和 上栗巣 |
| 89 | 1023 | 平家の宝 | 大和 内ヶ谷 |

『奥美濃よもやま話』 1 金子貞二 (奥美濃よもやま話刊行会) 1971

| 番号 | 掲載開始頁 | 題名 | 伝承地 |
|----|-------|-----------|-------|
| 1 | 50 | 寒水の加平淵 | 明宝 寒水 |
| 2 | 52 | 又助岩と又助ぶち | 明宝 寒水 |
| 3 | 60 | 川佐長者と茶釜岩 | 八幡 旭 |
| 4 | 70 | 鶴佐の新平さと牛鬼 | 明宝 寒水 |
| 5 | 106 | 耳柿 | 明宝 寒水 |
| 6 | 109 | 尾会津の力末孫 | 明宝 寒水 |

『奥美濃よもやま話』 2 金子貞二 (奥美濃よもやま話刊行会) 1971

| | | | |
|----|-----|----------|--------|
| 7 | 41 | おまむ桜 | 白鳥 長滝 |
| 8 | 80 | 水沢上が池 | 明宝 水沢上 |
| 9 | 83 | 小川の大滝の主 | 明宝 小川 |
| 10 | 108 | 本光寺の七不思議 | 明宝 寒水 |
| 11 | 111 | 鳥居宮と成就の宮 | 明宝 寒水 |

『奥美濃よもやま話』 5 金子貞二 (明方村教育委員会) 1976

| | | | |
|----|-----|----------|--|
| 12 | 121 | 目を抜かれた鬼瓦 | |
|----|-----|----------|--|

『高鷺村史』 山川新輔 (高鷺村役場) 1960

| 番号 | 掲載開始頁 | 題名 | 伝承地 |
|----|-------|---------|--------|
| 1 | 740 | 猪の洞の山うば | 高鷺 穴洞 |
| 2 | 742 | 名刀千束丸 | 高鷺 向鷺見 |
| 3 | 742 | 巣郷の池田 | 高鷺 切立 |
| 4 | 743 | 巣郷の庄左 | 高鷺 切立 |

『高鷲村史』 山川新輔 (高鷲村役場) 1960

| 番号 | 掲載開始頁 | 題名 | 伝承地 |
|----|-------|------------|--------|
| 5 | 743 | 大蛇のぬけ穴 | 高鷲 切立 |
| 6 | 744 | 庄左の後妻 | 高鷲 切立 |
| 7 | 745 | さらけが池 | 高鷲 鷲見 |
| 8 | 747 | 国境のとりきめ | 高鷲 鷲見 |
| 9 | 748 | 折立長者の白馬 | 高鷲 折立 |
| 34 | 1132 | 蜘蛛の又三 | 明宝 東気良 |
| 35 | 1134 | 蛇岩 | 明宝 寒水 |
| 36 | 1134 | おつとめをされる仏様 | 明宝 東気良 |
| 37 | 1137 | 絶やさない先祖の火 | 明宝 東気良 |
| 38 | 1139 | 本光寺の七不思議 | 明宝 寒水 |
| 39 | 1141 | カワロウのアイス | 明宝 小川 |
| 40 | 1142 | 気良口の地蔵様 | 明宝 二間手 |
| 41 | 1143 | 新四郎さ | 明宝 寒水 |

『白鳥町史』 通史編下巻 白鳥町教育委員会 (白鳥町) 1977

| 番号 | 掲載開始頁 | 題名 | 伝承地 |
|----|-------|--------------|---------|
| 1 | 801 | 浄安杉 | 白鳥 石徹白 |
| 2 | 801 | たか女が洞 | 白鳥 石徹白 |
| 3 | 802 | 和田の小池と竜神 | 白鳥 石徹白 |
| 4 | 802 | 畜生谷道者 | 白鳥 石徹白 |
| 5 | 804 | 首無し墓てん | 白鳥 石徹白 |
| 6 | 805 | 鴛谷長者の話 | 白鳥 石徹白 |
| 7 | 806 | 泰澄おやすみ岩 | 白鳥 前谷 |
| 8 | 806 | 千人塚 | 白鳥 前谷 |
| 9 | 806 | 阿弥陀ヶ滝由来 | 白鳥 前谷 |
| 10 | 807 | 村間ヶ池の大蛇 | 白鳥 前谷 |
| 11 | 807 | 駒の尾滝と平家平 | 白鳥 歩岐島 |
| 12 | 808 | 与太郎淵 その1 | 白鳥 歩岐島 |
| 13 | 808 | 与太郎淵 その2 | 白鳥 歩岐島 |
| 14 | 809 | おまむ桜 | 白鳥 長滝 |
| 15 | 810 | 二日町城の人柱 | 白鳥 二日町 |
| 16 | 811 | 仏岩と天狗岩 | 白鳥 二日町 |
| 17 | 811 | おしゃれ塚 | 白鳥 二日町 |
| 18 | 811 | 向小駄良の「牛の子」由来 | 白鳥 向小駄良 |
| 19 | 812 | 仮宿淵のかわろう | 白鳥 中津屋 |
| 20 | 813 | 酒の出た谷 | 白鳥 白鳥 |
| 21 | 814 | 仏田 | 白鳥 為真 |
| 22 | 815 | 原口城 | 白鳥 中西 |
| 23 | 815 | きん洞の水 | 白鳥 六ノ里 |
| 24 | 816 | 礫場 | 白鳥 那留 |
| 25 | 816 | 雄池 | 白鳥 那留 |
| 26 | 817 | 那留ヶ野の狐 | 白鳥 那留 |
| 27 | 818 | よもの(妖怪)の話 | |
| 28 | 818 | 日本一のへこきじじ | |
| 29 | 819 | へびと娘 | |
| 30 | 820 | 瓜姫小女郎 | |
| 31 | 821 | まま子と本子 | |

『明宝村史』 通史編下巻 明宝村教育委員会 (明宝村教育委員会) 1993

| 番号 | 掲載開始頁 | 題名 | 伝承地 |
|----|-------|-----------|--------|
| 1 | 1103 | 耳柿 | 明宝 寒水 |
| 2 | 1106 | 光明寺の天狗 | 明宝 西気良 |
| 3 | 1107 | 水沢上が池 | 明宝 奥住 |
| 4 | 1110 | 六部の墓 | 明宝 小川 |
| 5 | 1110 | 蓮如岩 | 明宝 東気良 |
| 6 | 1112 | 春日明神 | 明宝 小川 |
| 7 | 1113 | 鳥居宮と成就の宮 | 明宝 気良 |
| 8 | 1115 | 鶴佐の新平さと牛鬼 | 明宝 寒水 |

『明宝村史』 通史編下巻 明宝村教育委員会 (明宝村教育委員会) 1993

| 番号 | 掲載開始頁 | 題名 | 伝承地 |
|----|-------|------------------|--------|
| 9 | 1118 | 樋の木淵の化けぐも | 明宝 寒水 |
| 10 | 1118 | 惣左淵の化けぐも | 明宝 西気良 |
| 11 | 1119 | 布淵の岩魚 | 明宝 寒水 |
| 12 | 1119 | 釜淵の岩魚 | 明宝 西気良 |
| 13 | 1119 | 化淵の岩魚 | 明宝 小川 |
| 14 | 1120 | 丈が洞の主 | 明宝 奥長尾 |
| 15 | 1120 | 大滝の主 | 明宝 小川 |
| 16 | 1120 | 気良川のガワロウ | 明宝 気良 |
| 17 | 1123 | 名馬磨墨の里 | 明宝 西気良 |
| 18 | 1123 | 池月と馬糞石 | 明宝 寒水 |
| 19 | 1124 | 本光寺の先祖 | 明宝 寒水 |
| 20 | 1124 | 蓮浄寺の先祖 | 明宝 奥住 |
| 21 | 1125 | 割り洞 | 明宝 東気良 |
| 22 | 1126 | 布頭と布尻 | 明宝 寒水 |
| 23 | 1126 | オンバゴゼン | 明宝 寒水 |
| 24 | 1127 | 牛オレ | 明宝 東気良 |
| 25 | 1127 | スケド | 明宝 寒水 |
| 26 | 1127 | 弁慶石と弁慶岩 | 明宝 寒水 |
| 27 | 1127 | 栃尾谷の石 | 明宝 二間手 |
| 28 | 1128 | 架けぞくなくなった横谷山の石の橋 | 明宝 畑佐 |
| 29 | 1128 | 弘法様の足跡 | 明宝 二間手 |
| 30 | 1128 | 落ちて来た話と出て行った話 | 明宝 |
| 31 | 1129 | 牛嫌いの神様 | 明宝 東気良 |
| 32 | 1129 | 心は残ると約束した神様 | 明宝 小川 |
| 33 | 1129 | 鈴虫・松虫 | 明宝 西気良 |
| 34 | 1132 | 蜘蛛の又三 | 明宝 東気良 |
| 35 | 1134 | 蛇岩 | 明宝 寒水 |
| 36 | 1134 | おつとめをされる仏様 | 明宝 東気良 |
| 37 | 1137 | 絶やさない先祖の火 | 明宝 東気良 |
| 38 | 1139 | 本光寺の七不思議 | 明宝 寒水 |
| 39 | 1141 | カワロウのアイス | 明宝 小川 |
| 40 | 1142 | 気良口の地蔵様 | 明宝 二間手 |
| 41 | 1143 | 新四郎さ | 明宝 寒水 |

『これでちよっきりきのこっば』 白鳥町役場 (白鳥町) 1984

| 番号 | 掲載開始頁 | 題名 | 伝承地 |
|----|-------|-----------|-----|
| 1 | 2 | 若い衆と山鳥取り | 六ノ里 |
| 2 | 4 | 山犬のお礼 | |
| 3 | 6 | 鬼が笑う | 二日町 |
| 4 | 8 | ムカデの呼び使い | |
| 5 | 10 | 鮎と鯛とコチ | |
| 6 | 11 | お月様とお日様 | 柿が洞 |
| 7 | 14 | 谷川の増水 | 恩地 |
| 8 | 16 | 那留ヶ野のクソ溜 | 中西 |
| 9 | 18 | 娘と馬のクソ | 中西 |
| 10 | 20 | 正月の御馳走 | 中西 |
| 11 | 22 | 那留ヶ野の一軒家 | 那留 |
| 12 | 24 | 那留ヶ野の赤鬼 | 那留 |
| 13 | 26 | 小淵の火の玉 | 前谷 |
| 14 | 28 | 借家の幽霊 | 白鳥 |
| 15 | 29 | 木曾川为天ピン | |
| 16 | 31 | 内ヶ谷村の子供 | 内ヶ谷 |
| 17 | 33 | 江戸の嫁さがし | |
| 18 | 36 | ウソつき八助 | 為真 |
| 19 | 38 | 勇助のウソ話 | 六ノ里 |
| 20 | 39 | ヒノ木に柿がなった | 六ノ里 |
| 21 | 41 | ババサの手紙 | 六ノ里 |
| 22 | 43 | 盗人と”へ” | 白鳥 |

『これでちよつきりきのこっば』 白鳥町役場（白鳥町）1984

| 番号 | 掲載開始頁 | 題 名 | 伝 承 地 |
|----|-------|------------|-------|
| 23 | 45 | 若い衆の江戸見物 | |
| 24 | 48 | 越前の相撲取り | 牛道 |
| 25 | 50 | 帰ってござった円空様 | 中西 |
| 26 | 51 | 西坂の金のツボ | 西坂 |

『ふるさと高鷲 辛夷の記』 上村彰隆（上村彰隆）1999

| 番号 | 掲載開始頁 | 題 名 | 伝 承 地 |
|----|-------|------------|-------|
| 1 | 20 | 鷲退治 | |
| 2 | 30 | 八百相 | |
| 3 | 33 | やまんば | 穴洞 |
| 4 | 37 | 郡上谷 | |
| 5 | 39 | やせ松の墓 | 鷲見 |
| 6 | 42 | 泰澄の来村 | |
| 7 | 44 | 大日岳 | |
| 8 | 45 | 蛭が野 | 蛭が野 |
| 9 | 48 | 折立長者 | 折立 |
| 10 | 56 | 長者の白馬 | 折立 |
| 11 | 59 | 正会の戦 | |
| 12 | 61 | 大屋淵 | |
| 13 | 67 | 名刀千束丸 | |
| 14 | 71 | 巢郷の池田 | |
| 15 | 74 | 蛇抜け | |
| 16 | 76 | 庄左の後妻 | |
| 17 | 79 | 狐の嫁入り | 大が野 |
| 18 | 79 | 池の平 | |
| 19 | 80 | 瞽女洞 | |
| 20 | 82 | 大蛇の恩返し | 小洞 |
| 21 | 85 | 赤牛滝 | 切立 |
| 22 | 87 | 四本杭 | |
| 23 | 90 | 皿気ヶ池（悲恋物語） | |

『白山麓 石徹白の歴史と民俗』 石徹白忠（石徹白忠）1999

| 番号 | 掲載開始頁 | 題 名 | 伝 承 地 |
|----|-------|--------------|-------|
| 1 | 293 | 墓点 | 石徹白 |
| 2 | 294 | 祠山の天狗 | 石徹白 |
| 3 | 294 | ずり石 | 石徹白 |
| 4 | 294 | 義経のまぼろし | 石徹白 |
| 5 | 294 | 根後山と二又朴葉 | 石徹白 |
| 6 | 296 | 岩苔山のたか女屋敷 | 石徹白 |
| 7 | 297 | 伊野淵 | 石徹白 |
| 8 | 299 | 首無ぼてんの由来 | 石徹白 |
| 9 | 303 | 大杉 | 石徹白 |
| 10 | 304 | 浄安杉 | 石徹白 |
| 11 | 305 | 打波あせ池 | 石徹白 |
| 12 | 307 | 和田襷せ池の伝説 | 石徹白 |
| 13 | 309 | パパが倉の怪物 | 石徹白 |
| 14 | 309 | おじらみ谷の滝壺の主の話 | 石徹白 |
| 15 | 310 | 平七倉 | 石徹白 |
| 16 | 318 | 蛇切り長助 | 石徹白 |
| 17 | 320 | 滝ヶ洞の大蛇 | 石徹白 |
| 18 | 321 | 一本杉とヘンビの枕石 | 石徹白 |
| 19 | 323 | 打波襷せ池の主 | 石徹白 |
| 20 | 325 | 池の平の主を追い払った話 | 石徹白 |
| 21 | 325 | 鷹が鳩になった話 | 石徹白 |
| 22 | 328 | 山男の話 | 石徹白 |
| 23 | 328 | 俵谷山の怪物の話 | 石徹白 |
| 24 | 328 | 平家の一夜城 | 石徹白 |
| 25 | 329 | 朝日添山に仏像があった話 | 石徹白 |

『白山麓 石徹白の歴史と民俗』石徹白忠（石徹白忠）1999

| 番号 | 掲載開始頁 | 題 名 | 伝 承 地 |
|----|-------|--------------|-------|
| 26 | 329 | 猟師の兄弟愛 | 石徹白 |
| 27 | 330 | 朝日添山にある木地屋の墓 | 石徹白 |
| 28 | 332 | 御来光石 | 石徹白 |
| 29 | 332 | 山犬に送られる話 | 石徹白 |
| 30 | 332 | こうを經た猫の話 | 石徹白 |
| 31 | 333 | たか女 | 石徹白 |
| 32 | 334 | 狐狸妖怪談 | 石徹白 |
| 33 | 336 | 左膳が狐に化かされた話 | 石徹白 |
| 34 | 337 | 狐が女に化けた話 | 石徹白 |
| 35 | 337 | 狐の提灯 | 石徹白 |
| 36 | 338 | 道覚墓点に火柱が立つ事 | 石徹白 |
| 37 | 338 | 祠野狐にあたられた話 | 石徹白 |
| 38 | 339 | 茶畑の狐が美人に化ける話 | 石徹白 |
| 39 | 340 | 馬の尻をのぞいた話 | 石徹白 |
| 40 | 341 | 天狗の木切り | 石徹白 |
| 41 | 342 | 古井戸の怪 | 石徹白 |
| 42 | 343 | 河童に医術を習った話 | 石徹白 |
| 43 | 343 | 市兵衛 地獄 | 石徹白 |

『白山麓 石徹白拾遺録』石徹白忠（石徹白忠）2002

| 番号 | 掲載開始頁 | 題 名 | 伝 承 地 |
|----|-------|---------|-------|
| 1 | 72 | 蛇切り忠助 | 石徹白 |
| 2 | 74 | 和田の小池の主 | 石徹白 |
| 3 | 118 | 根后川の夫婦岩 | 石徹白 |
| 4 | 118 | 大まわりの怪談 | 石徹白 |

『いとしろの昔話 石徹白鼎翁手記「無碍の花」』上村俊邦編（上村俊邦）2013

| 番号 | 掲載開始頁 | 題 名 | 伝 承 地 |
|----|-------|----------------|-------|
| 1 | 1 | 和田山の打波襷池と天人 | 石徹白 |
| 2 | 2 | 須間長者と鴛鴦 | 石徹白 |
| 3 | 3 | 鴛鴦長者の話 | 石徹白 |
| 4 | 6 | 猿と猿橋 | 石徹白 |
| 5 | 7 | 石徹白と駿馬池月（生嘍） | 石徹白 |
| 6 | 8 | 天馬と石徹白馬 | 石徹白 |
| 7 | 9 | たか女と手鞠歌 | 石徹白 |
| 8 | 11 | 五輪塔と大師 | 石徹白 |
| 9 | 12 | 浄安と浄安杉 | 石徹白 |
| 10 | 13 | 小白山と御輿宿 | 石徹白 |
| 11 | 14 | 朝日添川と川熊 | 石徹白 |
| 12 | 15 | 保川の一つ目岩魚 | 石徹白 |
| 13 | 17 | 天狗と山神 | 石徹白 |
| 14 | 18 | 鬼神山 池の平と鬼九郎右衛門 | 石徹白 |
| 15 | 19 | 馬の首と芒原 | 石徹白 |
| 16 | 19 | 泰澄大師の母と鬼神 | 石徹白 |
| 17 | 20 | 長者屋敷と呼ばり岩 | 石徹白 |
| 18 | 21 | 下谷の釜と龍宮 | 石徹白 |
| 19 | 22 | 地藏洞と龍女 | 石徹白 |
| 20 | 22 | 平家塚と轆轤師 | 石徹白 |
| 21 | 23 | 道勝坊と道勝淵 | 石徹白 |

郡上郷土史研究会会員名簿

2013.3.1

| | 氏名 | 自宅郵便番号 | 自宅住所 | 自宅電話番号 | 備考 |
|----|-------|----------|-------------|---------|--------|
| 1 | 石神堯生 | 501-4611 | 大和町万場2233 | 88-2413 | 理事・会長 |
| 2 | 井俣初枝 | 501-4611 | 大和町万場578 | 88-2758 | 理事 |
| 3 | 大野一道 | 501-4601 | 大和町大間見4-1 | 88-2230 | 理事 |
| 4 | 大野紀子 | 501-4601 | 大和町大間見4-1 | 88-2230 | |
| 5 | 加藤文藏 | 501-4612 | 大和町剣43-1 | 88-2802 | |
| 6 | 河合利雄 | 501-4612 | 大和町剣30 | 88-3520 | 理事・書記 |
| 7 | 雉野尚子 | 501-4616 | 大和町島1558福田 | 88-3564 | 理事 |
| 8 | 此島恵理子 | 501-4616 | 大和町島3607 | 88-3659 | |
| 9 | 佐尾チドリ | 501-4613 | 大和町名皿部335 | 88-3544 | 理事・会計 |
| 10 | 佐藤光一 | 501-4612 | 大和町剣57-1 | 88-3201 | 理事・副会長 |
| 11 | 佐藤とき子 | 501-4224 | 八幡町城南町287-2 | 65-4303 | |
| 12 | 白石博男 | 5015121 | 白鳥町白鳥464-2 | 82-3235 | |
| 13 | 高橋義一 | 501-4612 | 大和町剣720-1 | 88-3792 | 理事 |
| 14 | 瀧日準一 | 501-4608 | 大和町牧845-1 | 88-2705 | 理事 |
| 15 | 瀧日千代美 | 501-4608 | 大和町牧1001 | 88-3059 | |
| 16 | 田中篤 | 501-4616 | 大和町島1924福田 | 88-2792 | |
| 17 | 箕勝美 | 501-4612 | 大和町剣380-2 | 88-2031 | |
| 18 | 松井賢雄 | 501-4601 | 大和町大間見1791 | 88-3991 | |
| 19 | 山田白陽 | 501-4616 | 大和町島1289 | 88-3437 | |
| 20 | 山田真人 | 501-4605 | 大和町神路1776 | 88-2114 | 監事 |
| | | | | | |
| | | | | | |

「史苑やまと」第9号

平成二十五年三月三十一日 発行

編集発行 郡上郷土史研究会
印刷所 白鳥印刷